

う さ はち まん けい ない
宇佐八幡境内遺跡

1992

袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成3年度に袋井市教育委員会が実施した、袋井市水道事業第6期拡張事業第五配水池築造事業に伴う宇佐八幡境内遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、袋井市教育委員会社会教育課文化振興係松井一明を発掘調査の担当者として実施した。
3. 本調査、本書刊行に係る事務については、袋井市教育委員会社会教育課文化振興係が行った。
4. 本書の編集、執筆、挿図、図版の作成、写真撮影は松井が行った。
5. 本調査で得た資料については、すべて袋井市教育委員会が保管している。
6. 本書の作成にあたっては下記の方々に御教示、資料の提供を賜り、記して感謝の意を示します。(敬称略)

柴田 稔 栗野克巳 中鉢賢治 土佐博文 内藤朝雄 塚本裕巳 永井義博 佐野一夫
漆田 敏 塚本和弘 戸塚和美 松本一男 戸村寿彦 佐藤由紀夫 鈴木敏則 中嶋郁夫
森下章司 佐野五十三

凡 例

本書で用いた遺構の記号は以下のとおりである。

S I = 竪穴状遺構 S B = 掘立柱建物 S K = 土坑 S D = 溝状遺構 P = 小穴

目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 発掘調査の経過・調査整理体制	1
i) 調査の経過 ii) 調査整理体制	
第3章 周辺遺跡の動向	2
第4章 遺 跡	4
第1節 基本層位・埋没谷	4
第2節 遺 構	4
i) 方形周溝墓 ii) 掘立柱建物 iii) 竪穴状遺構・溝・土坑 iv) 古墳	
第3節 遺 物	24
i) 弥生時代の遺物 ii) 古墳時代の遺物 iii) 奈良～中世の遺物	
第5章 考 察	28
第1節 静岡県下における中期方形周溝墓の出現過程について	28
i) はじめに ii) 宇佐八幡境内遺跡の方形周溝墓の群構成	
iii) 静岡県内における中期方形周溝墓の群構成 iv) まとめ	
第2節 宇佐八幡境内遺跡周辺域における5世紀の首長墓と初期群集墳の動向	39
i) はじめに ii) 宇佐八幡境内古墳群について	
iii) 和田岡原とその周辺地域の首長墓の変遷について iv) まとめ	

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置図	3
第2図	周辺遺跡と調査地点図	3
第3図	埋没谷土層図	4
第4図	発掘調査区全体図	5
第5図	1・2号方形周溝墓実測図	7
第6図	2号方形周溝墓溝内土器棺・3号方形周溝墓実測図	8
第7図	4号方形周溝墓・5号墳実測図	9
第8図	5号方形周溝墓実測図	10
第9図	6号方形周溝墓実測図	11
第10図	7号方形周溝墓実測図	12
第11図	8・9号方形周溝墓実測図	13
第12図	3・4・5・7号方形周溝墓主体部実測図	14
第13図	掘立柱建物実測図1	16
第14図	掘立柱建物実測図2	17
第15図	竪穴状遺構・溝状遺構実測図	18
第16図	土坑実測図1	19
第17図	土坑実測図2	20
第18図	3号墳実測図1	21
第19図	3号墳実測図2	22
第20図	4号墳実測図	23
第21図	遺物実測図1	25
第22図	遺物実測図2	26
第23図	遺物実測図3	27
第24図	宇佐八幡境内遺跡方形周溝墓群構成図	29
第25図	山下遺跡・掛の上遺跡方形周溝墓群構成図	32
第26図	能島遺跡・瀬名遺跡方形周溝墓群構成図	33
第27図	歳勝土遺跡方形周溝墓群構成図	34
第28図	宇佐八幡境内古墳群地形測量図	41
第29図	石ノ形古墳地形測量図	43
第30図	石ノ形古墳出土遺物実測図1	45
第31図	石ノ形古墳出土遺物実測図2	46
第32図	和田岡原とその周辺地域の首長墓変遷図	47

図 版 目 次

- 図版 1 1. 遺跡航空写真全景 2. 発掘区西部分全景（北より）
- 図版 2 1. 発掘区東部分全景（南より） 2. 1～3号墓全景（東より）
- 図版 3 1. 3号墓（東より） 2. 4号墓（東より） 3. 7・8号墓（南より）
- 図版 4 1. 3号墓主体部（東より） 2. 4号墓主体部（東より） 3. 5号墓主体部（東より）
- 図版 5 1. 7号墓主体部（東より） 2. SB4（西より） 3. 3・4号墓周溝（手前3号墳西より）
- 図版 6 1. 2号墓出土土器棺 2. 方形周溝墓出土遺物 3. 埋没谷・包含層出土遺物
- 図版 7 1. 石ノ形古墳全景（西より） 2. 石ノ形古墳墳丘断面（南西より）
- 図版 8 1. 1トレンチ全景（西より） 2. 1トレンチ内周溝（南西より） 3. 出土遺物

宇佐八幡境内遺跡発掘調査報告

第1章 調査に至る経過

袋井市が、北原川地内に給水を行う袋井市水道事業第6期拡張事業第五配水池築造事業を計画し埋蔵文化財の取り扱いについて相談があったのは、平成2年10月の事であった。袋井市教育委員会はこれを受けて、さっそく工事区域に埋蔵文化財が所在しているかどうか検討をしたところ、宇佐八幡境内遺跡が所在していることが判明したため、平成3年度に発掘調査を実施する計画を検討した。工事の開始時期は平成3年9月以降であり、この工期に合わせることが可能であったため現地発掘調査は平成3年6月～8月に実施することとした。

第2章 発掘調査の経過・調査整理体制

i) 調査の経過

平成3年6月3日～6月17日

発掘調査地は茶園として利用されていた場所なので、まず茶園の改植状況を知るためバックホーにより試掘を行った。その結果発掘調査区中央部分で浅い改植と、東南端で谷地形を埋めて茶園を造っていることが判明したため、さきに遺構の残存状況がよいと予想される西端と北東部分について表土をバックホーにより掘削し調査を進めた。西端部分では方形周溝墓が列をなして発見され排土量も当初の予定よりも多くなってきた。

6月18日～6月28日

西端部分の調査が終わってきたので、北東端部分の調査を開始した。北東端部分については古墳の周溝と掘立柱建物と思われる柱穴が多数検出された。また南側部分では一部埋没谷の調査を行ったところ奈良時代の遺物が発見された。両調査区の発掘調査は完了したので、写真撮影を行った後に遺構の実測にとりかかった。

7月1日～7月23日

改植の行われたと考えられる中央部分の表土をバックホーにて掘削し調査を開始した。方形周溝墓の深いものについては遺構が残存していたものの浅い遺構についてはほとんど残っていなかった。南東部分の埋没谷については包含層らしいものがほとんど残っていなかったので、拡張トレンチを一部設け人力で調査を行い埋没谷の範囲を確認するにとどめた。おおむね調査は完了したので、写真撮影を行った後に遺構の実測にとりかかり、プレハブの建っていた場所など未発掘の所を調査しすべての現地調査を完了した。

ii) 調査整理体制

調査実施機関 静岡県袋井市教育委員会

教育長 浅井通男 社会教育課長 岩崎 保 文化振興係長 小粥保夫

文化振興係 吉岡伸夫 建部千代子 永井義博 加藤理文 松井一明（調査担当者）

白沢 崇 森井雅彦

調査参加者 榊原熊四 鈴木定雄 中川栄吉 三浦久雄 加藤博司 兼子 肇 高橋邦夫
高橋四郎 安間しげ子 太田清子 鈴木きみ子 戸倉みつ子 早川里美
山崎好江 龍崎光子 井上登貴子

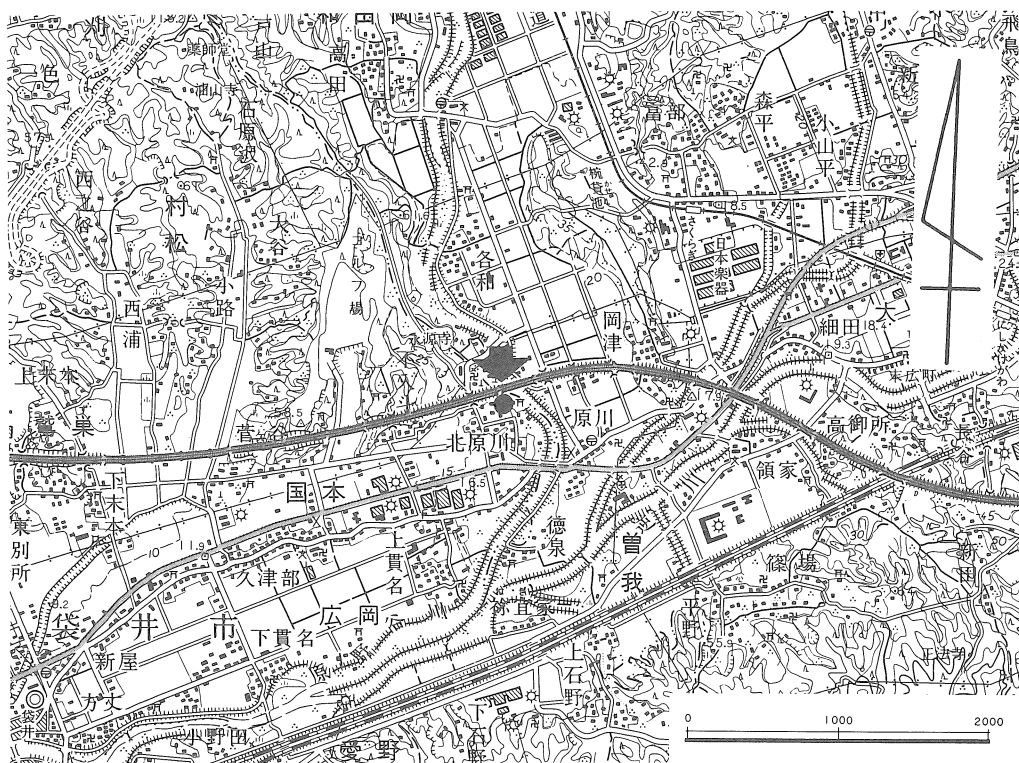
第3章 周辺遺跡の動向

今回の調査ではおもに弥生時代中期の方形周溝墓、後期の集落、古墳時代の6世紀前半代の初期群集墳などが見つかったので、周辺部の弥生時代～古墳時代の集落の動向を述べて歴史的背景の記述にかえたい。

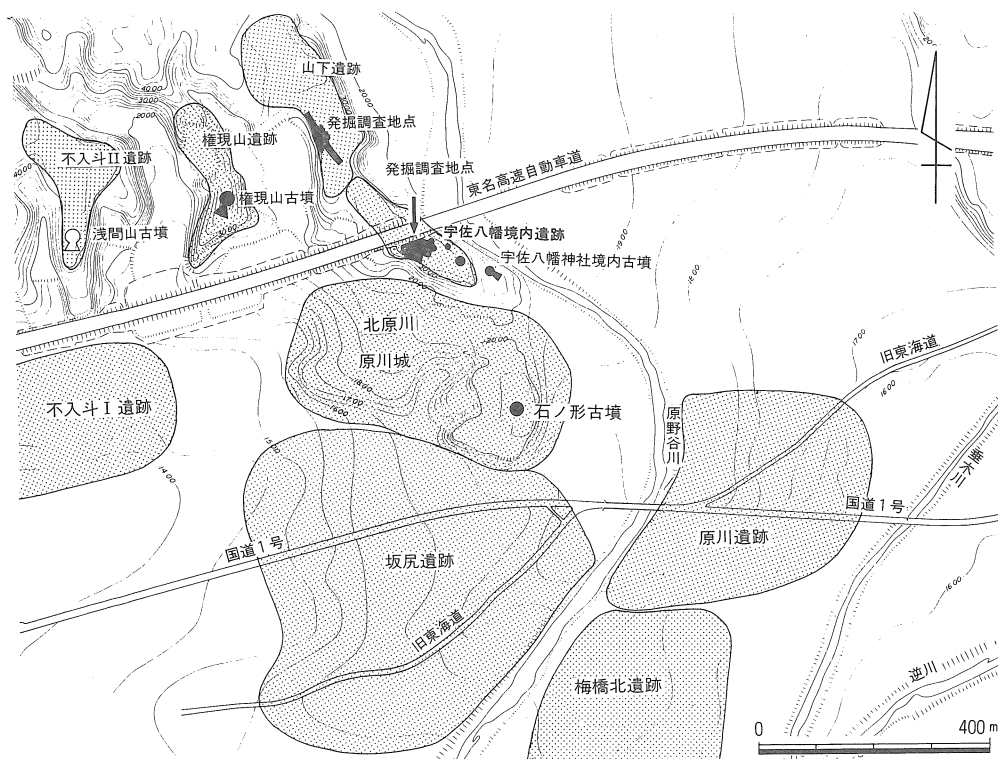
弥生時代中期の方形周溝墓群は、本調査地点より北へ200mの場所において山下遺跡の発掘調査が実施され中期中葉～後葉の方形周溝墓群が見つかった。東海東部～南関東にかけて方形周溝墓がどのように伝播したのか、当時南関東地方では中期中葉段階の方形周溝墓は発見されていない現状であったために、南関東地方への方形周溝墓伝播を考えるうえで貴重な調査例となった。今回の調査でも数少ないが中期中葉の方形周溝墓が発見され、宇佐八幡境内遺跡と山下遺跡は同一の方形周溝墓群であることが判明し、その規模は南北500m、東西200mの範囲になる大方形周溝墓群であることが予測される。中期の集落跡としては低地部の坂尻遺跡で中期後葉の水田、原川遺跡では中期中葉古段階の集落が見つかり、領家遺跡では中期後葉の土器が採集され、宇佐八幡境内遺跡ののる同一の台地及び段丘面では宇佐八幡境内遺跡の南方の原川城内遺跡で中期後葉の土器が採集され、山下遺跡の北方800mの金鑄原遺跡では中期後葉から始まる集落が発見されている。今のところ宇佐八幡境内遺跡の集落は山下遺跡の北部分かあるいは金鑄原遺跡と考えたほうがよさそうである。また、大形の方形周溝墓群の場合、たとえば坂尻遺跡や原川城内遺跡などの隣接する複数の遺跡群も含めたうえでの墓域とも考えられる。

弥生時代後期の集落は権現山遺跡や金鑄原遺跡で発見されている。低地部でも坂尻遺跡、梅橋北遺跡、領家遺跡などで弥生時代後期の土器が採集されている。後期は遠江地域だけみても今まで集落として利用されなかった丘陵地にまで集落が営まれるようになる時期で、宇佐八幡境内遺跡の集落もそうした動きと同一の現象と捉えられよう。

古墳時代中期の集落の状況はまだよくわかっていないが、坂尻遺跡では住居跡等が検出されており5世紀代の集落として見てよいだろう。また、今回発見された古墳のように6世紀前半代になると、坂尻遺跡でも集落規模が拡大し、原川遺跡などにも集落が成立するようである。現状では宇佐八幡境内古墳群の成立は坂尻遺跡、原川遺跡などの集落の拡大傾向と関係をもたせたほうが良いと考えられる。古墳時代も後期の群集墳の時期（6世紀末～7世紀）になると坂尻遺跡、原川遺跡などの集落が安定的に営まれ、原川城内遺跡もこの頃の集落として出現するようである。墓域も宇佐八幡境内遺跡から移動し、更に谷を奥にたどり袋井カントリーゴルフ場内の谷間に横穴墓群を形成するようである。この横穴墓群は菅ヶ谷横穴墓群といい、袋井市域でも山梨の宇刈横穴墓群と並んで有力な横穴墓群である。やがて、奈良時代になると坂尻遺跡には佐野郡家及び駅家が設置され宇佐八幡境内遺跡の周囲は袋井市域の一つの中心地として栄えるのである。



第1図 遺跡の位置図



第2図 周辺遺跡と調査地点図

第4章 遺 跡

第1節 基本層位・埋没谷

今回の調査では、遺構確認面が本来の層よりもかなり削平された状態で見つかったため、包含層は発見されなかった。しかし、発掘調査区東側では神社敷地に隣接し、古墳や埋没谷があったので、ある程度基本土層の堆積が見られた。第3図に埋没谷の土層を示したのでそれを基本土層として以下説明したい。

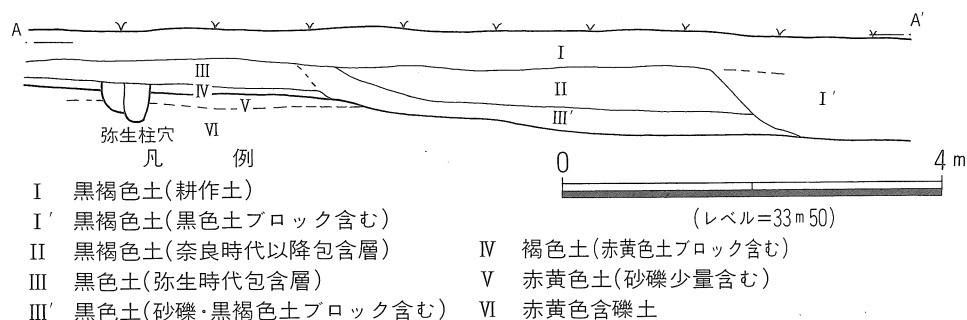
弥生時代の包含層はⅢ層黒色土で、谷部では流失したせいか存在していない。谷部では反対に奈良時代よりも新しい包含層と思われるⅡ層、奈良時代と弥生時代の土器を包含するⅢ'層が堆積している。このことは、本来古墳時代まであった弥生時代の包含層が奈良時代以降に何らかの原因で谷部が形成されたことにより流失したと考えられる。おそらく、奈良時代にたとえば雨量が増えるなどの気候変動があり、谷部が形成されたとも考えられようか、今後の検討課題であろう。

第2節 遺 構

今回の調査で検出された遺構は、弥生時代中期、後期、古墳時代中期、奈良時代の遺構であるが、中心時期は弥生時代中期の方形周溝墓と後期の集落跡である。

i) 方形周溝墓

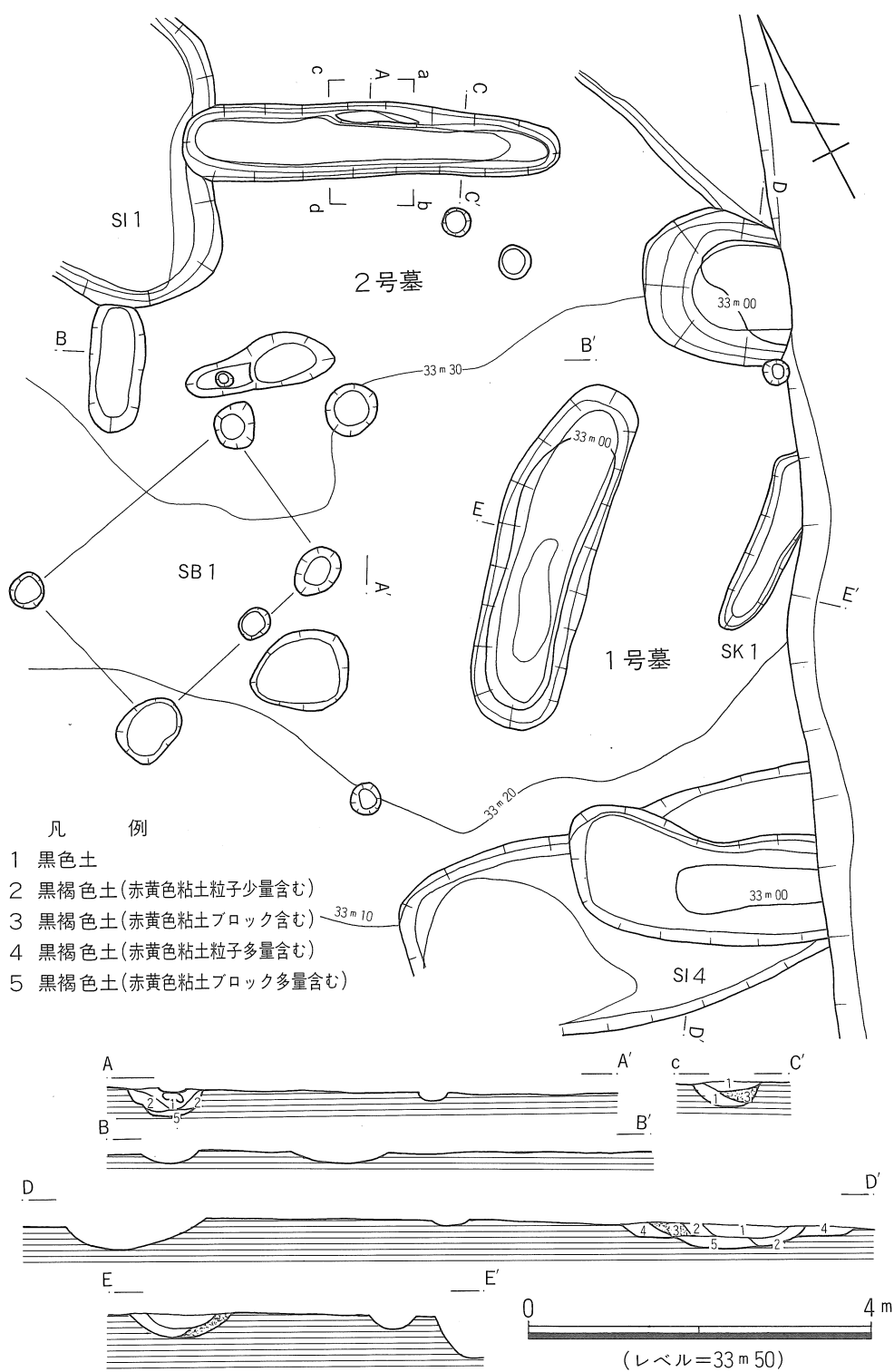
発掘区の西端の台地沿いに添って重列状に発見された。全体の形状が判明するものは少ないが、4号墓は4方向の溝が検出され溝の4隅が切れる当地域の中期方形周溝墓では一般的な形式の方形周溝墓群と推定される。ただし、8号墓については茶園改植あるいは埋没谷で溝が流失したのか、群の中では比較的はじに位置するので溝を省略する形式なのか判断できなかったが、本報告書では確認された溝も底に近い部分であったため、前者の考え方でいたい。

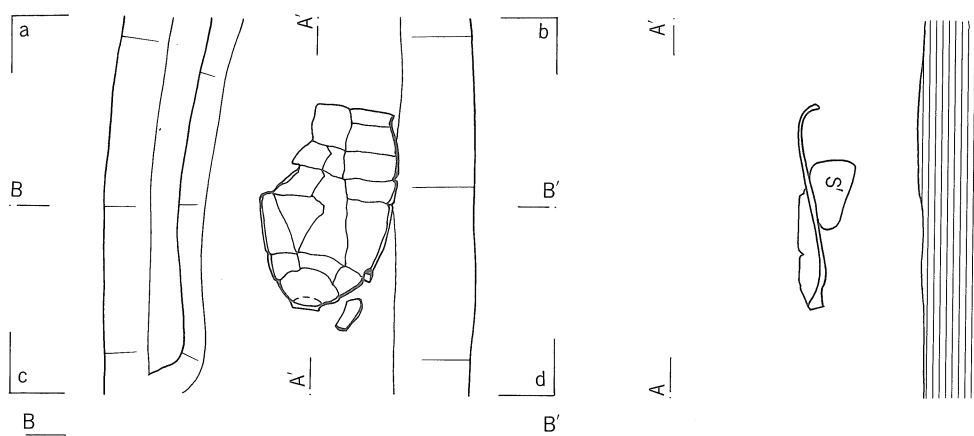


第3図 埋没谷土層図

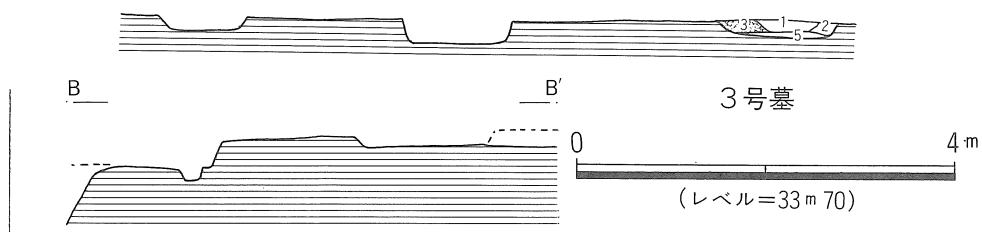
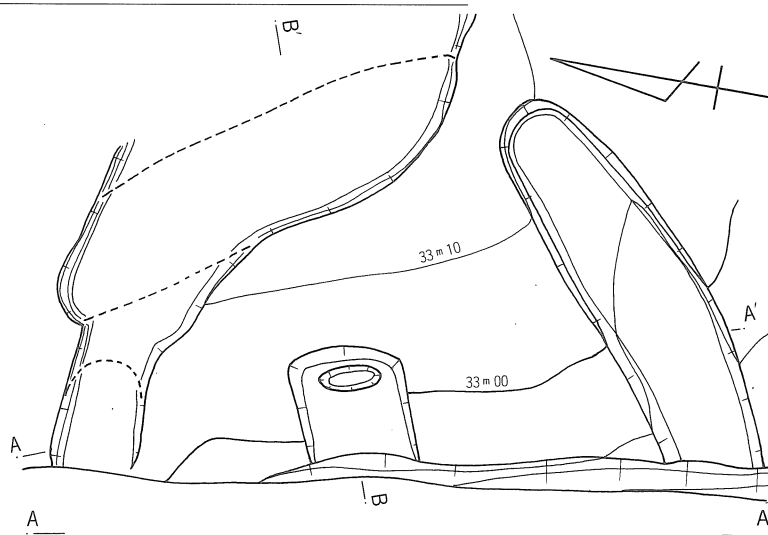
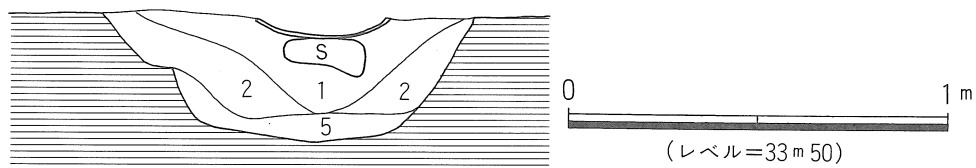


第4図 発掘調査区全体図

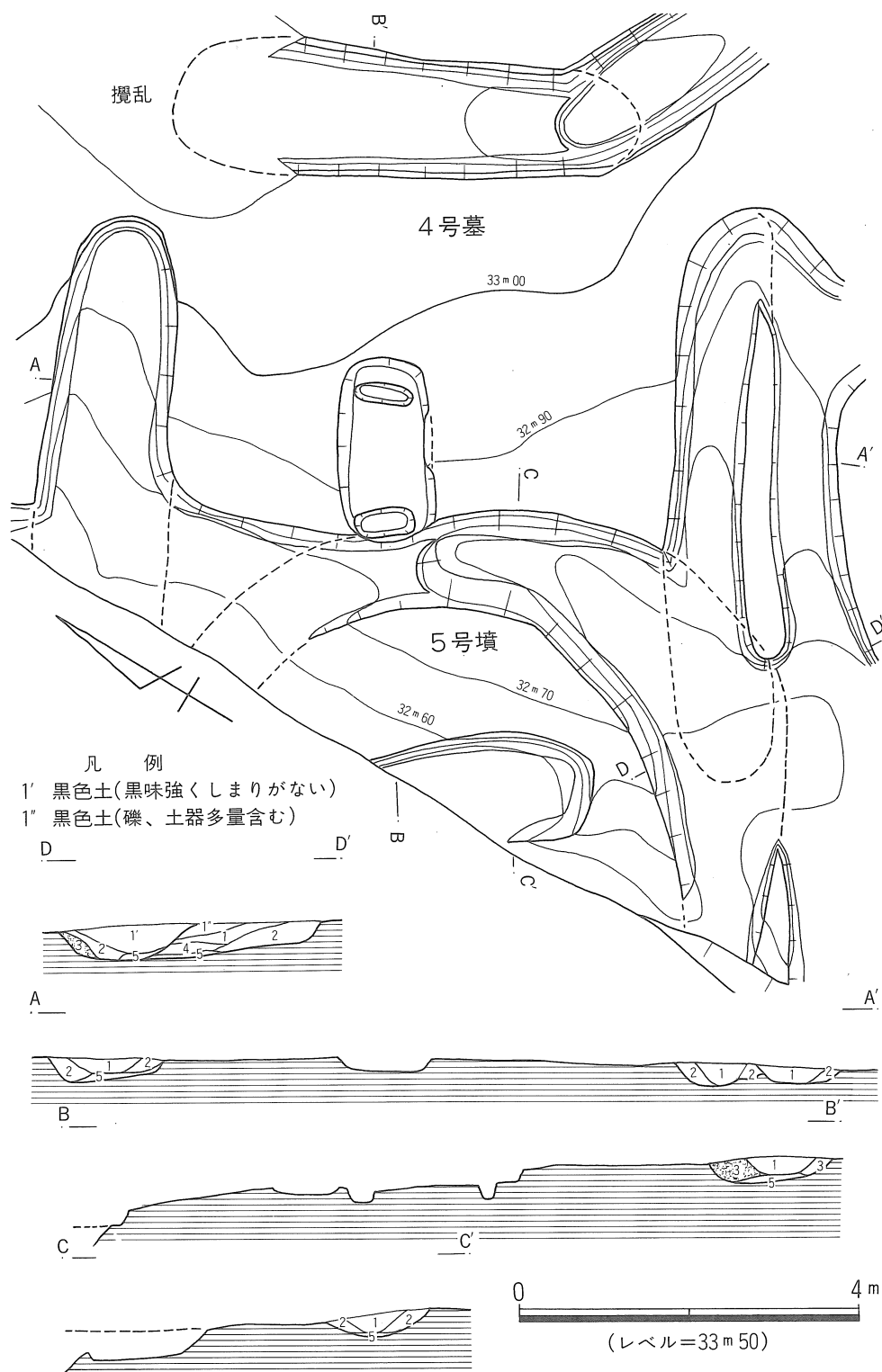




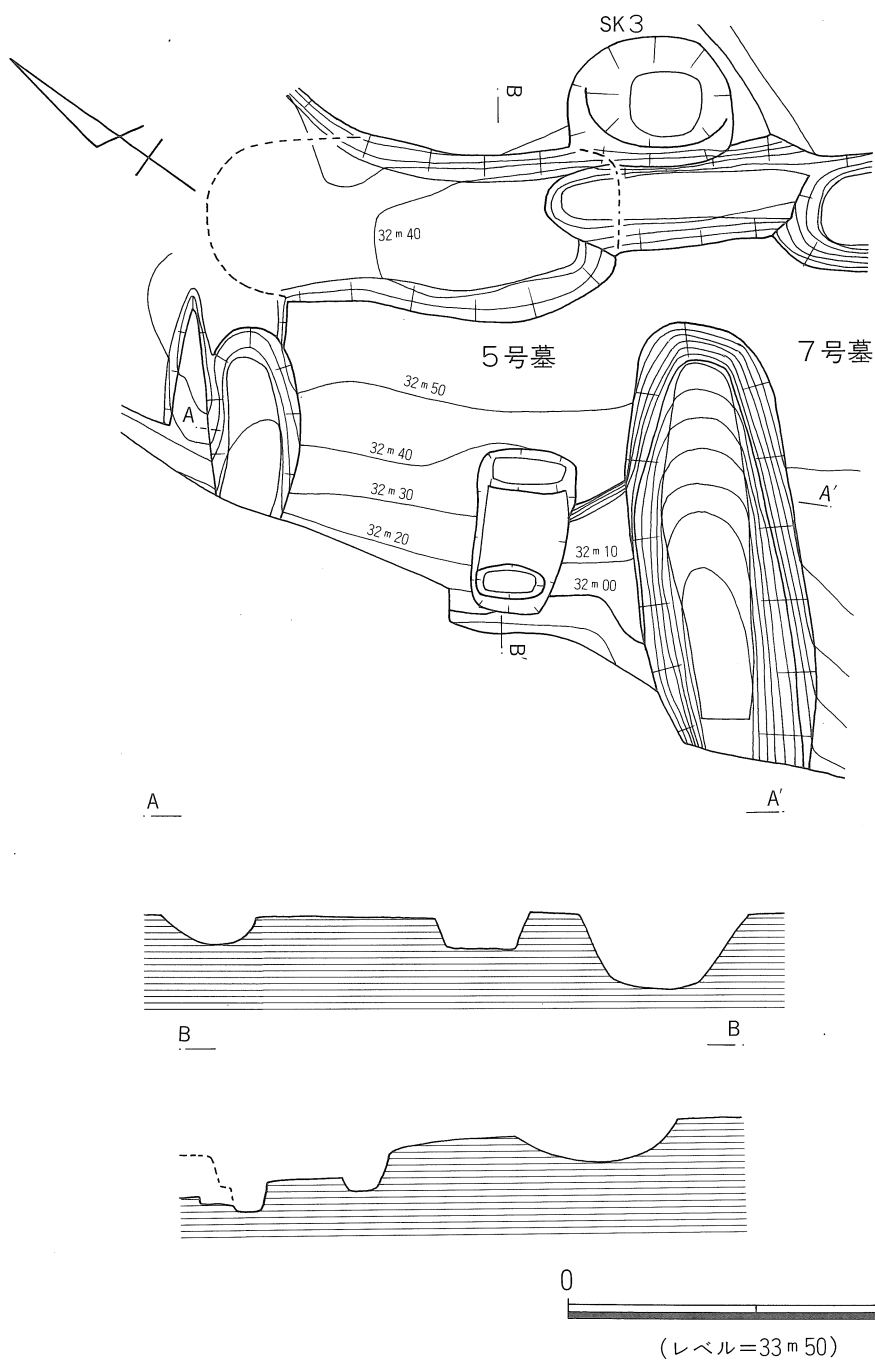
2号墓土器棺



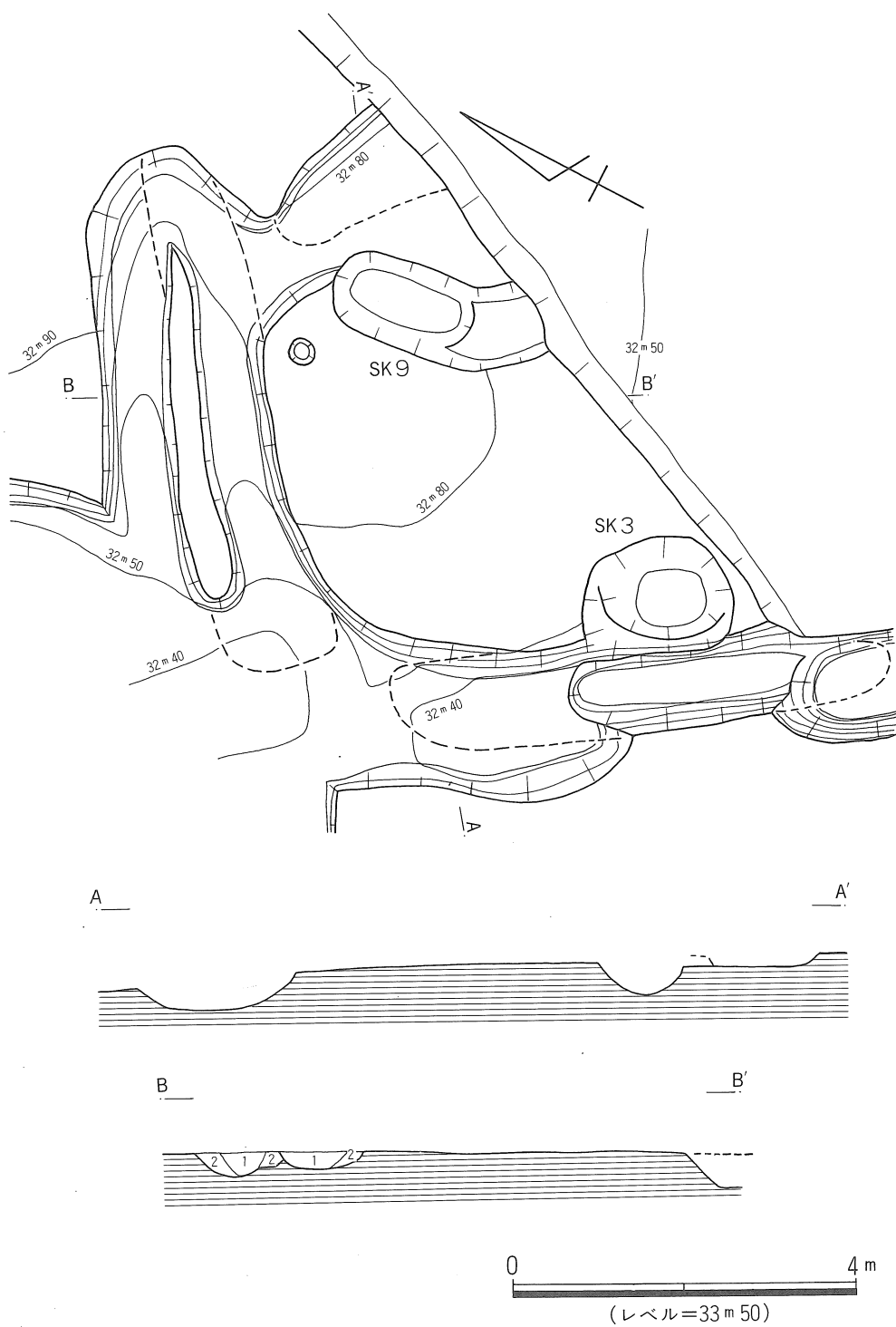
第6図 2号方形周溝墓溝内土器棺・3号方形周溝墓実測図



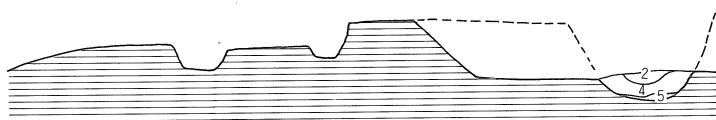
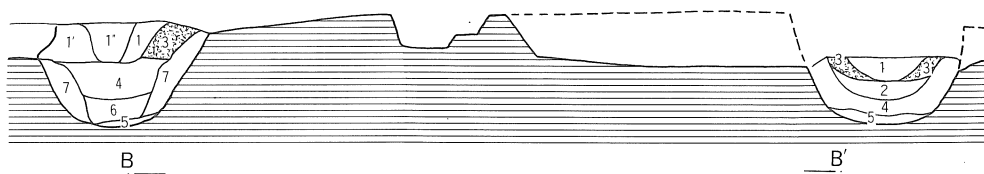
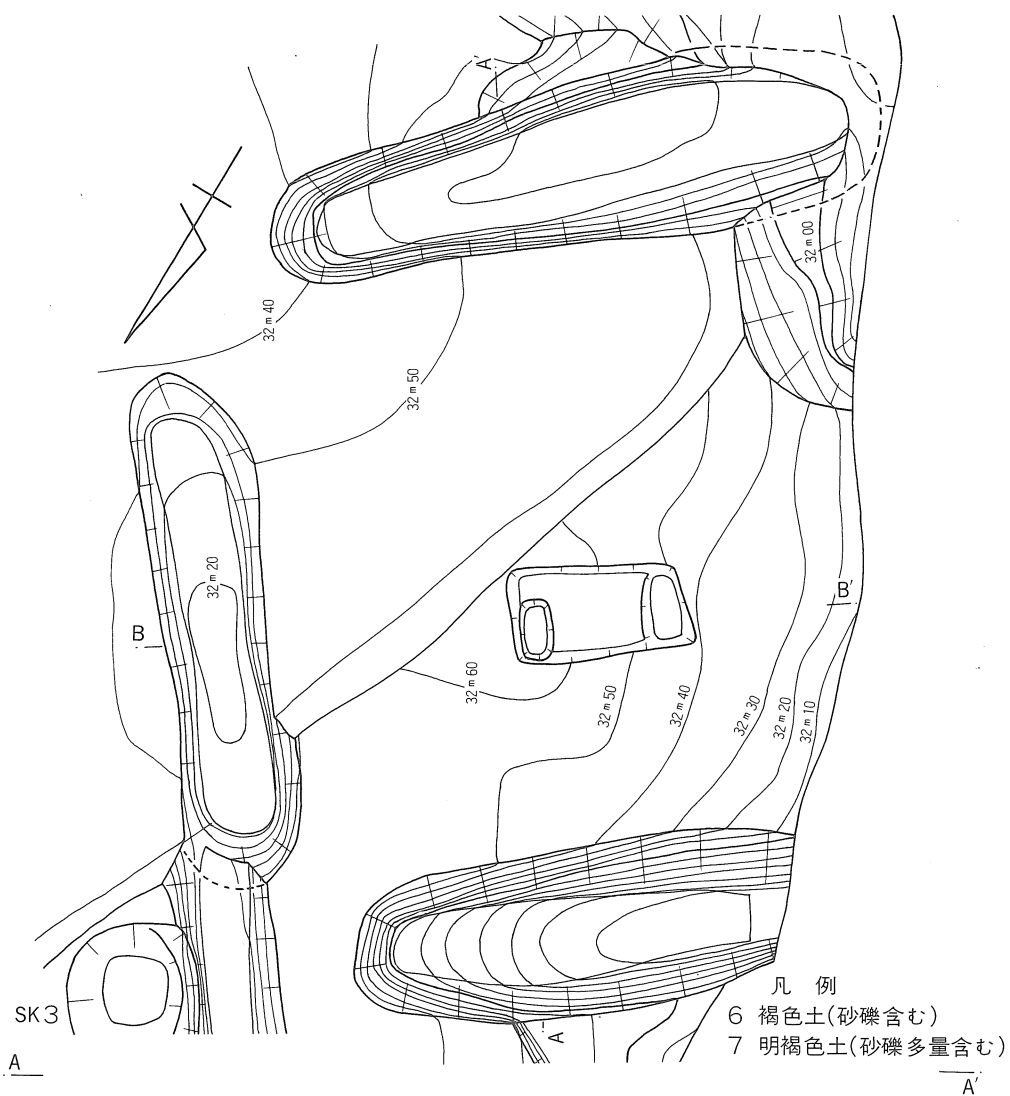
第7図 4号方形周溝墓・5号墳実測図



第8図 5号方形周溝墓実測図

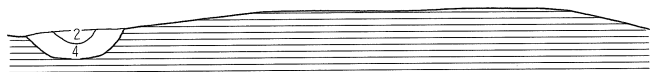
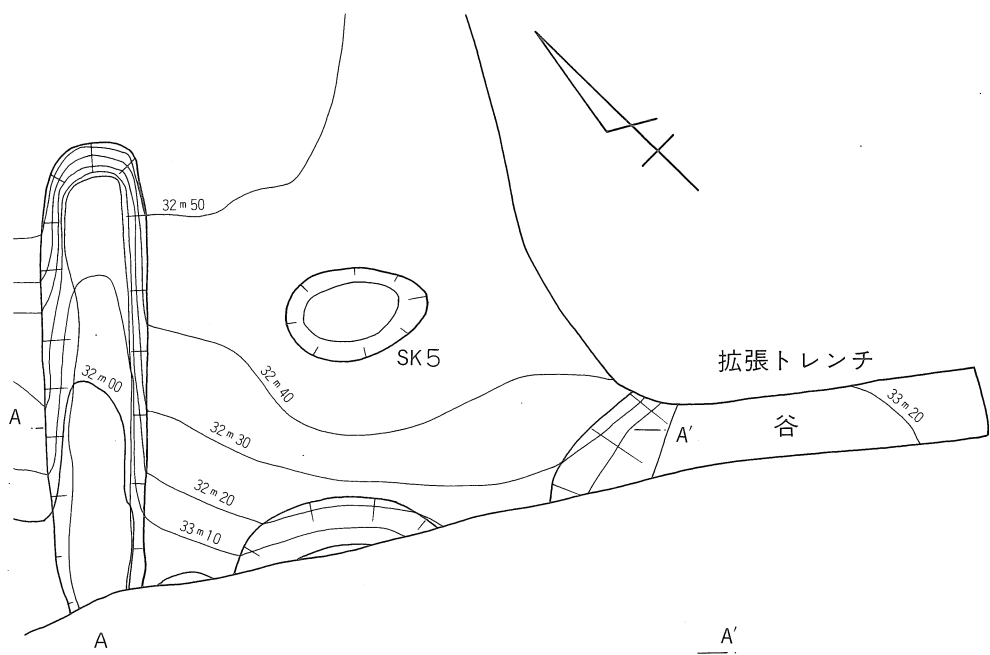


第9図 6号方形周溝墓実測図

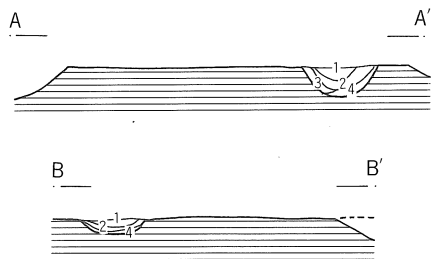
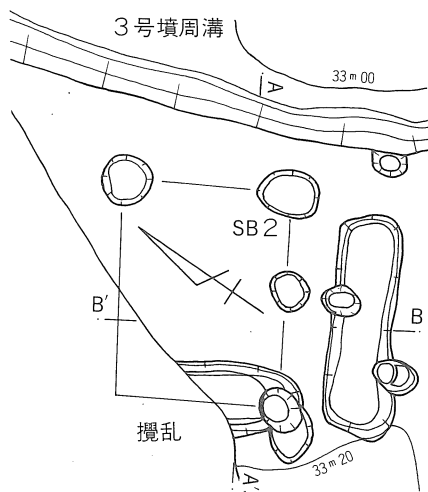


(レベル=33m 50)

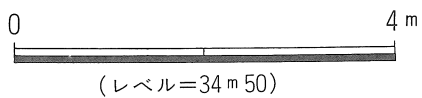
第10図 7号方形周溝墓実測図



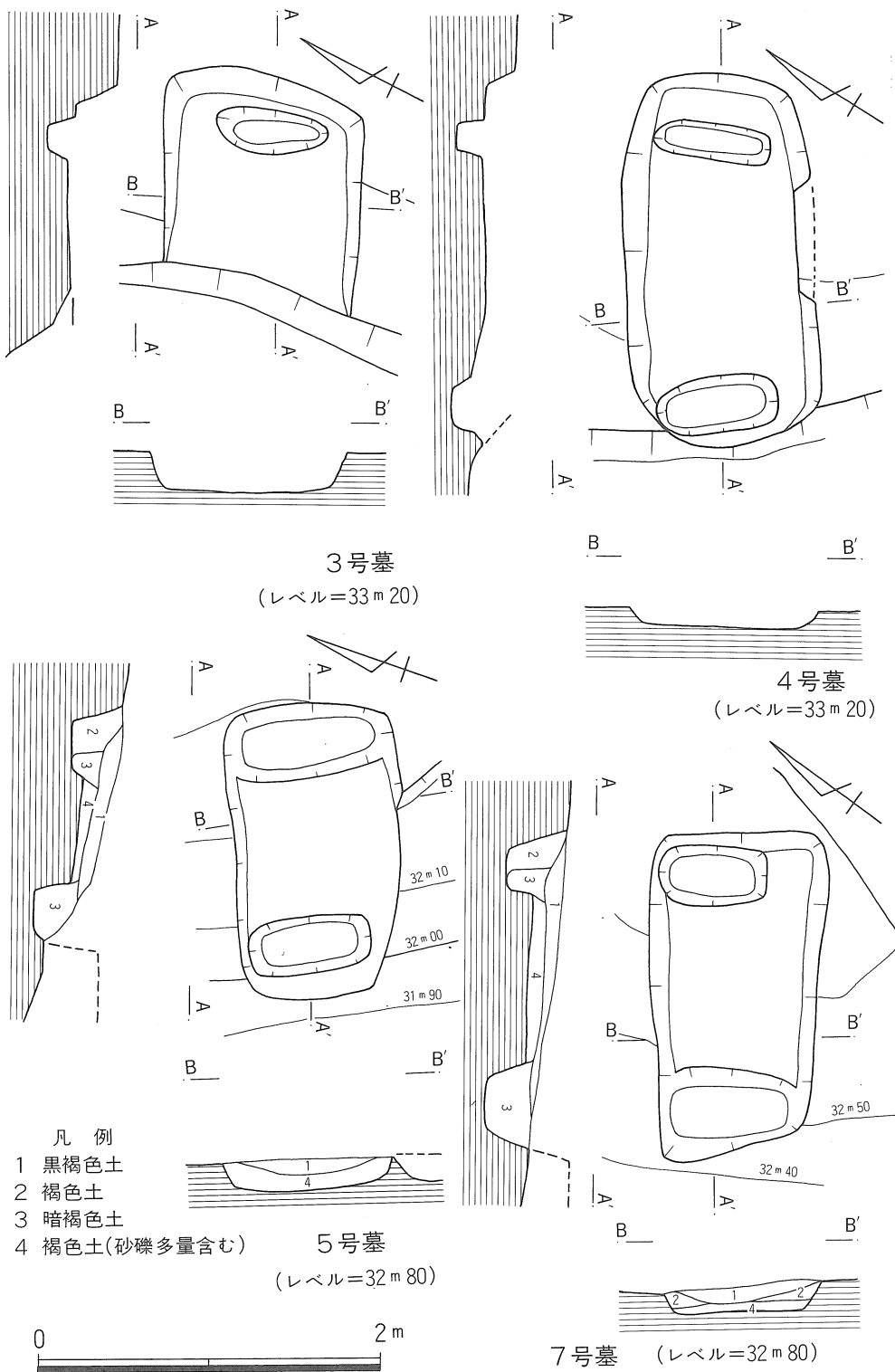
8号墓



9号墓



第11図 8・9号方形周溝墓実測図



第12図 3・4・5・7号方形周溝墓主体部実測図

規模は全体形のわかるものがないため推定値になるが、4号墓・8号墓が大形で溝外縁で約10m、小形の9号墓で約4m程度、他については約8m前後の規模になると思われる。

単位群の形成方法としては北から南方向へ3列発見され、3号墓と4号墓、7号墓と8号墓の溝は接続、1号墓と2号墓、4号墓と6号墓の溝は連結、5号墓と7号墓は結合と考えられる。接続関係について5号墓をみると主体部の位置が中心にないことから7号墓築造の際に5号墓の溝の再掘削をしている連結の可能性もすてきれないが、本報告書では結合ということで報告しておく。時期は土器の出土がないものもあるので確定的ではないが、出土土器及び溝の切り合い関係から2・9号墓が中期中葉でほかは中期後葉だと考えられる。なお、切り合い関係や築造順位、単位群の抽出については第5章に譲る。

主体部については3～5号墓、7号墓の斜面部に位置するグループから見つかっている。おそらく、斜面部の方形周溝墓は斜面の形状を利用して墳丘を見せる効果をねらったためそれほど墳丘土を盛る必要がなく、主体部が残りやすかったのだと考えられる。反対に台地頂部に立地する2・6・9号墓などは墳丘も高く築く必要があり、しかも後世の削平が著しかったため主体部は残らなかったといえようか。主体部の形式は瓜生堂遺跡の分類によるとⅡ類に属するもの（瓜生堂遺跡調査会 1981）で、山下遺跡や愛野向山Ⅱ遺跡の中期方形周溝墓の主体部と同じである。規模は堀方長軸2m前後、小口板内部で1m～1.5mを測り成人埋葬なら屈葬であろう。

ほかに2号墓の溝内で甕形土器を利用した土器棺が発見された。表面には煤が付着し使用済みの甕を棺に転用したと考えられる。断面観察の結果溝がかなり埋まった段階で、20cm程の細長い川原石を下にしき口を東に向け埋葬している。埋葬状態で土器の3分の2が茶園改植のため失われているが、単棺であった可能性が高いと思われる。時期は中期中葉である。

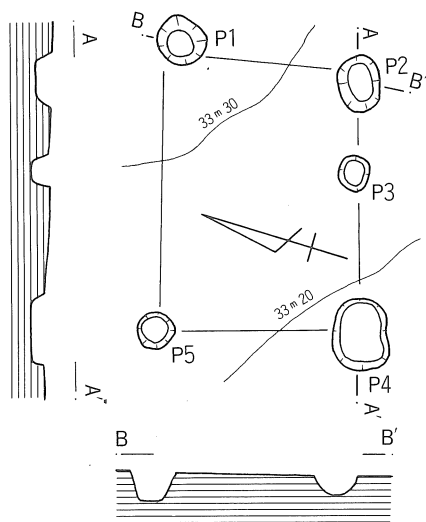
ii) 掘立柱建物（SB）

掘立柱建物は組み合わせが抽出できたものは7棟で、1間×2間の間口で桁間の規模が1.5m内外になるSB1～5と、全体形状は良くわからないが桁間の規模が2m内外になると思われるSB6・7がある。

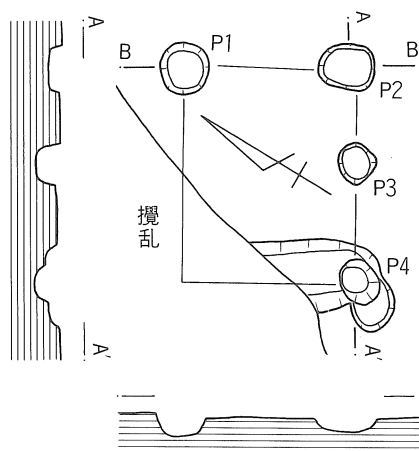
前者のSB1～4のうち梁行1にたいし桁行きの比率SB1で1.5、SB2は1.2、SB3は1.2、SB4は1.4になりSB1・4がある程度細長い建物になる。何れも弥生時代の掘立柱建物として一般的なものではSB1・4は平地式住居、SB2・3は高床倉庫の可能性はある。SB5については全体形がわからないので決め難いが、わかっている範囲での比率としては1.4よりも小さくなるであろうから高床倉庫の可能性を指摘したい。なおSB4については棟持ち柱建物になる可能性がある。

時期については柱穴出土土器が極端に少ないためなんともいえないが、古墳～奈良時代の土器は含まないこと、周辺部の遺構が弥生時代後期後半の土器を出すこと、弥生時代後期後半の土器がSB4の柱穴から出土していることなどから弥生時代後期後半の時期を考えたい。

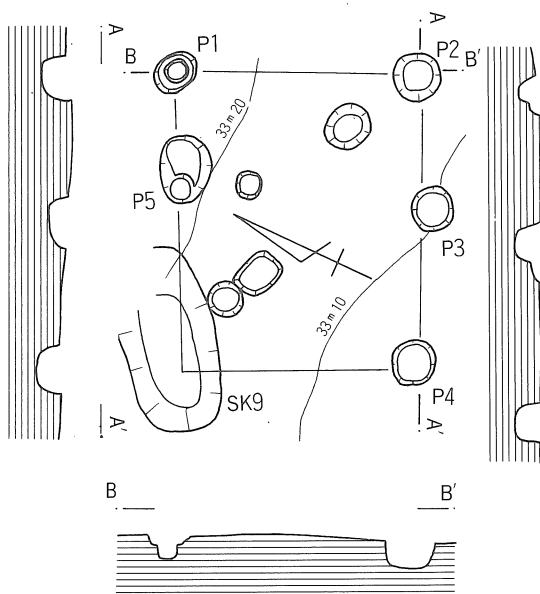
後者の桁間規模の大きい建物は全体形がわかっていないので、はたして掘立柱建物になるかも見当がつかないし柵列の可能性もある。どのような規模でどの時代のものかわからないが、土坑やほかの掘立柱建物との関係から弥生時代後期ないし奈良時代の遺構と考えたい。



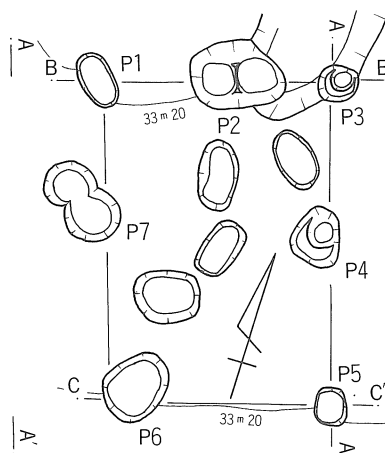
SB 1
(レベル=33 m 50)



SB 2
(レベル=33 m 50)



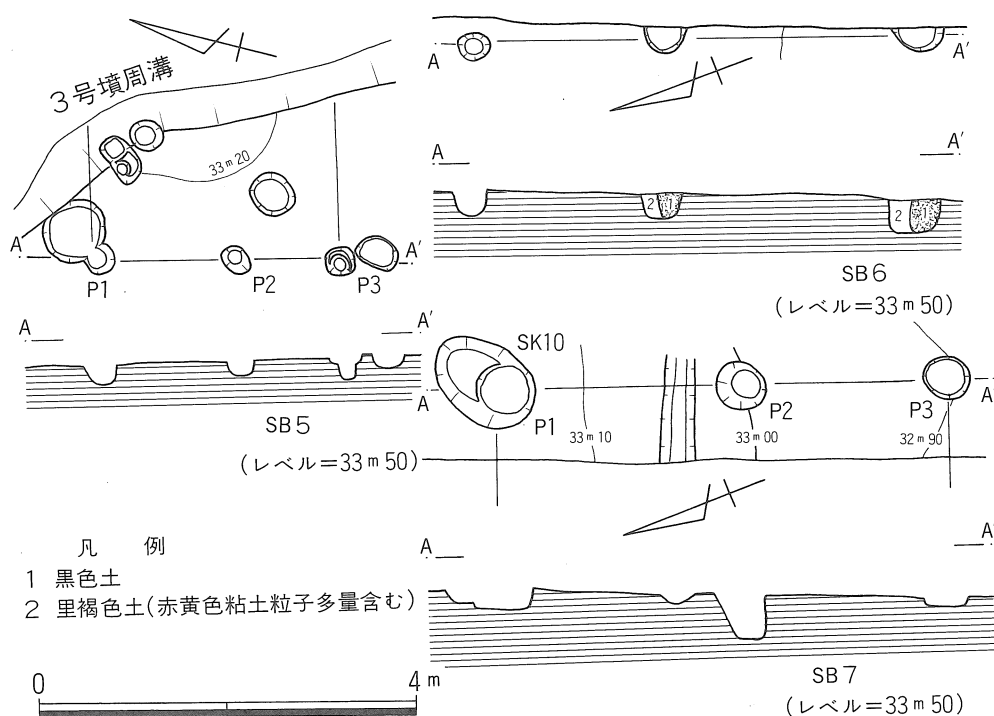
SB 3
(レベル=33 m 50)



SB 4
(レベル=33 m 50)



第13図 掘立柱建物実測図 1



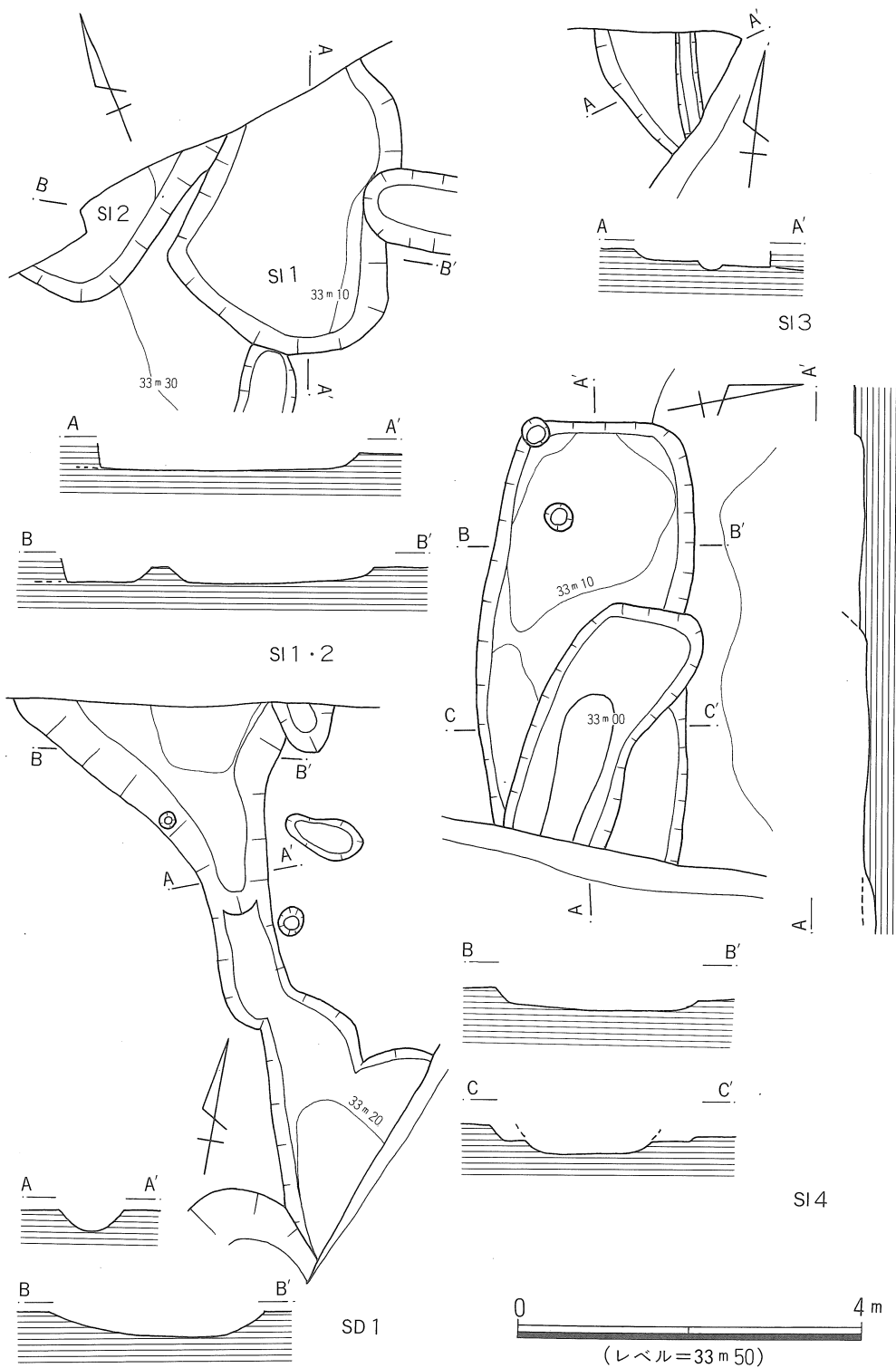
第14図 掘立柱建物実測図2

iii) 竪穴状遺構（S I）・溝（S D）・土坑（S K）

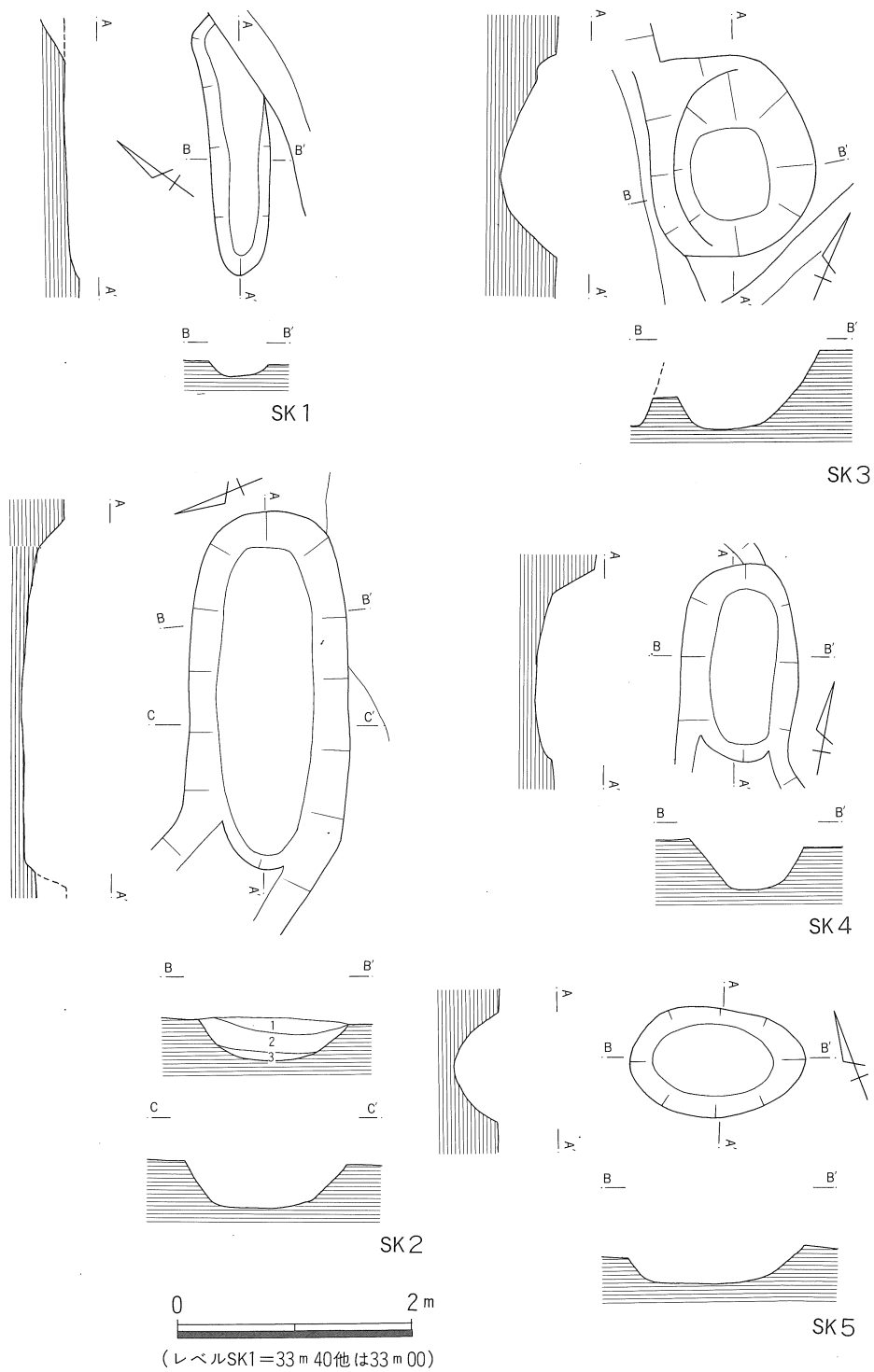
竪穴状遺構はS I 1～4まで検出された。S I 1・2は隣接し、S I 1からは古墳時代の土師器壊らしい小破片が出土しているので、古墳時代の遺構の可能性がある。性格についてはわからない。S I 3は壁溝らしい小溝が壁のやや内側にあり竪穴住居の可能性がある。掘立柱建物との関連を考えると弥生時代後期後半の遺構とも考えられるが時期の決められる資料はでない。S I 4は1号方形周溝墓により切られていることから弥生時代中期後葉以前の遺構と考えられるが、時期・性格を決められる資料はでない。

溝はS D 1が見つかったているが、幅は一定でなく古墳の前溝のようでもある。遺物は弥生時代中期中葉の土器が出土した。

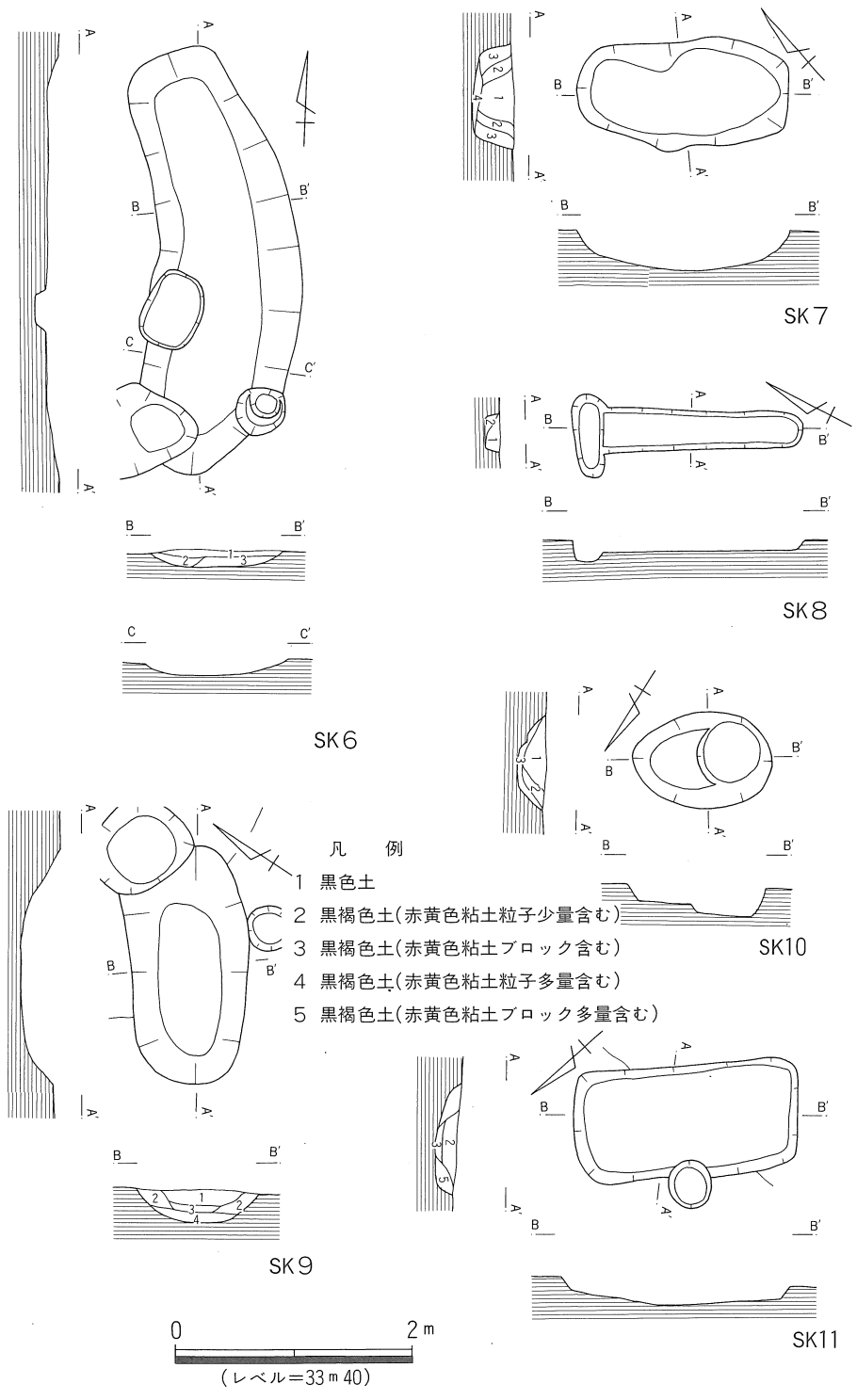
土坑はS K 1～11がある。このうち弥生時代後期頃の風倒木痕と思われる土坑は3～5・7である。方形周溝墓の溝状遺構に類似するものはS K 1・2・8、土坑墓的な方形のS K 11、楕円形のS K 9などがある。S K 1・2・8は方形周溝墓に関連した遺構と考えられるが組み合わせになる溝はない。S K 11は奈良時代の土師器の甕形土器小破片が出土しているので奈良時代の遺構であろう。S K 9については遺物はなく掘立柱建物に関係したものか、あるいは古墳に関係した土坑墓なら興味深いものがある。S K 6についてはまったく性格を知る資料はないが、柱穴よりも新しそうなので奈良時代の遺構かも知れない。



第15図 竪穴状遺構・溝状遺構実測図



第16図 土坑実測図 1



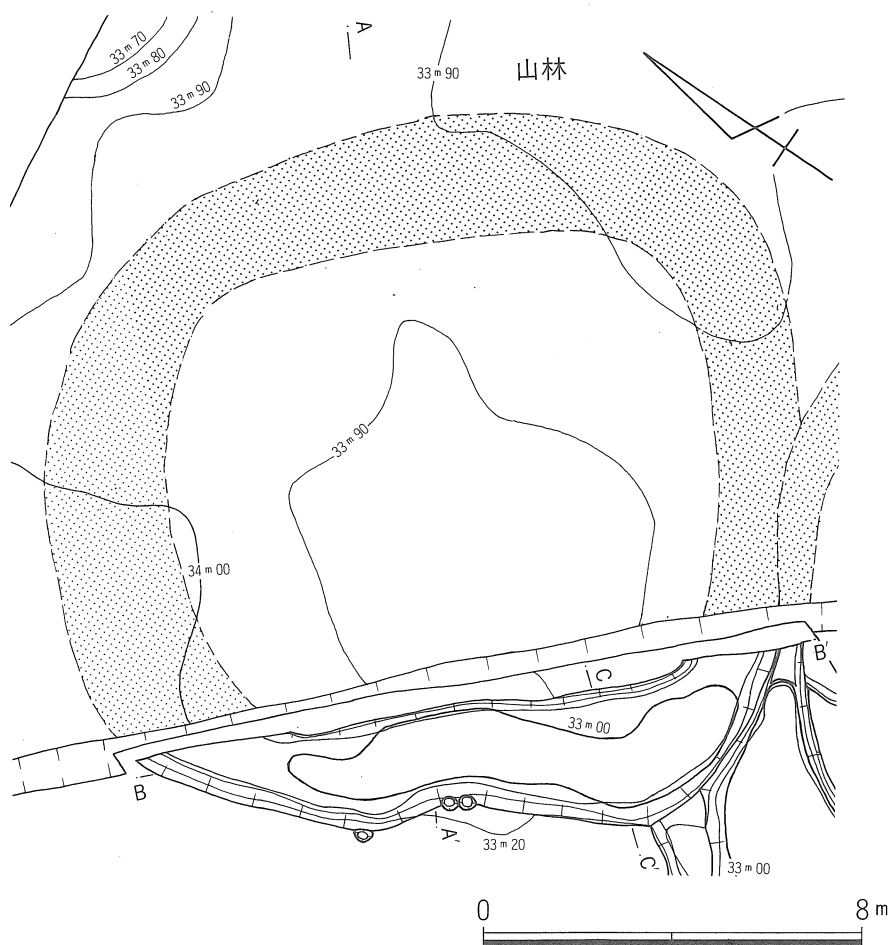
第17図 土坑実測図 2

iv) 古 墳

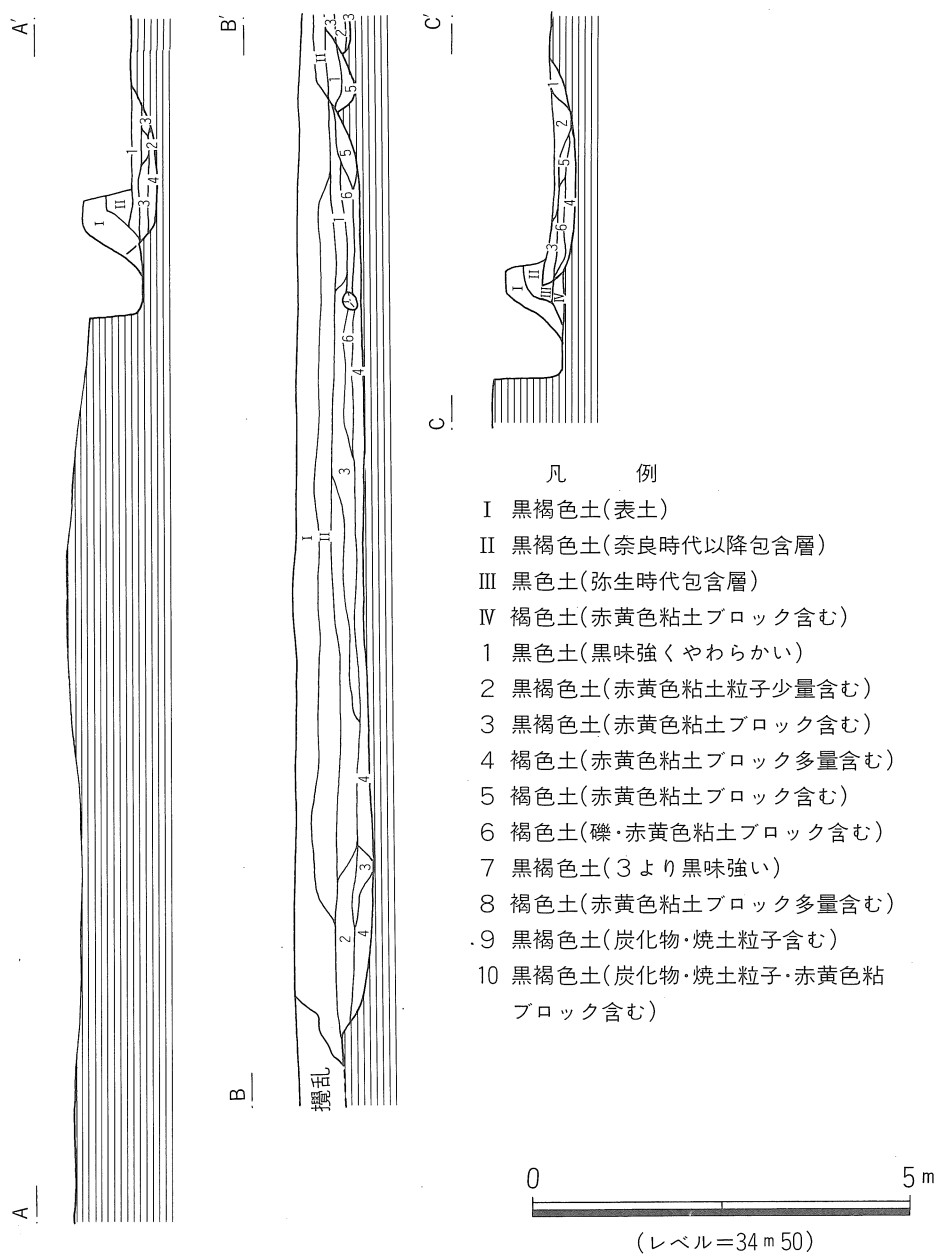
古墳の周溝は部分ではあったが3箇所発見でき、主体部は発掘区域外になると思われる。宇佐八幡境内にはすでに小形前方後円墳の宇佐八幡境内古墳群1号墳、円墳の同2号墳があるため今回発見された古墳の周溝を3～5号墳とした。

3号墳は発掘区域内では直線的に伸びた周溝をなし、墳丘部も直線的なラインを描くことから、円墳ではなく方形墳的な隅丸方形墳とでもいえる墳形をなしていると予想される。溝幅は2.5m前後、深さは確認面から0.5mを測る。今回調査で見つかった周溝から判断すると、周溝外縁で一辺約15mの隅丸方形墳になると推定される。墳丘の盛土は神社との地境溝の攪乱のためはっきり検出できなかったが、Ⅲ層が古墳の基盤層になっておりⅡ層は古墳築造後の土層であることは確認できた。

4号墳は3号墳の周溝と一部切り合って東どなりに築かれている。溝の形状からすると4号

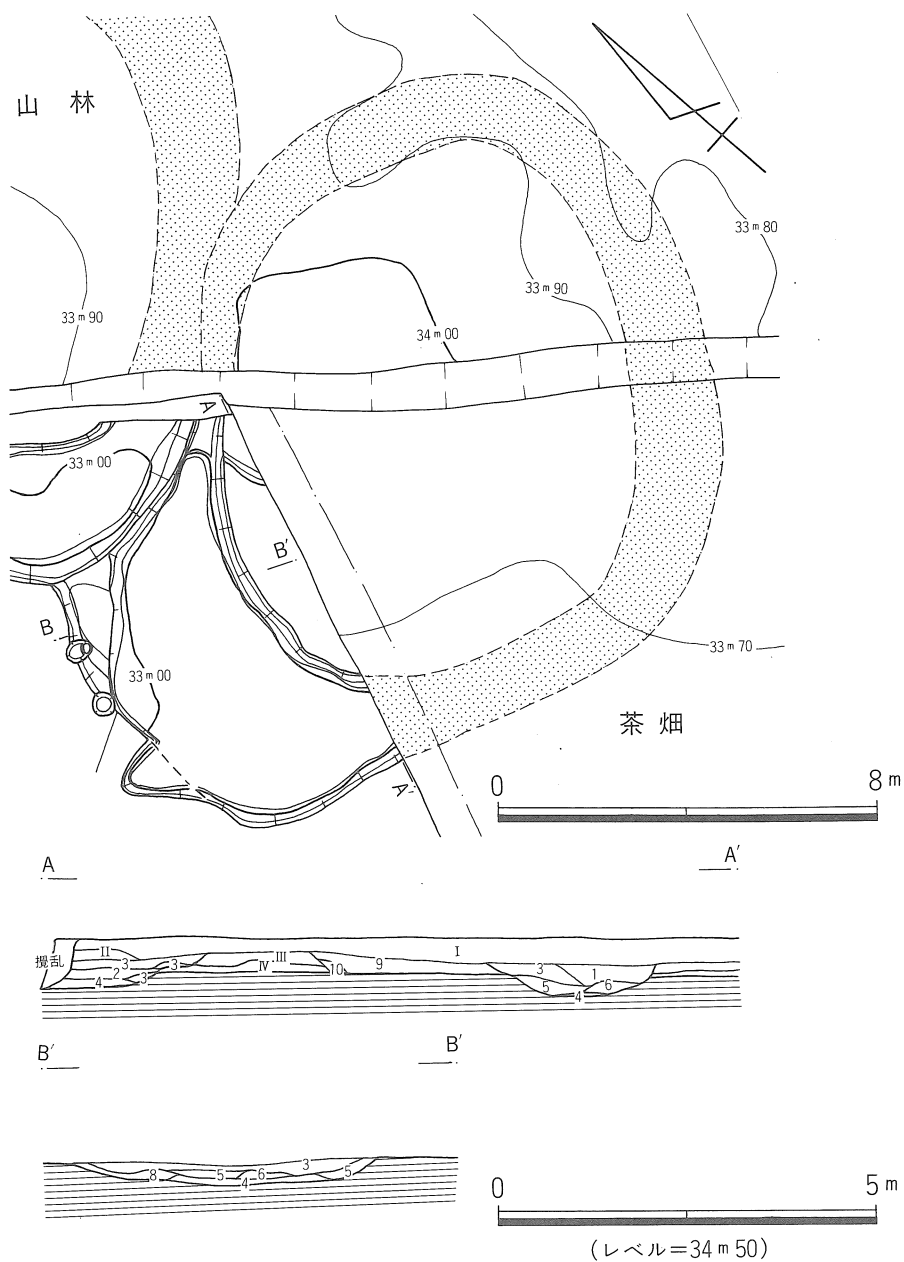


第18図 3号墳実測図1



第19図 3号墳実測図2

墳は円墳の可能性が高い。今回の調査で見ついている周溝の形状から4号墳の規模は周溝外縁で直径12mの円墳になる可能性が高い。4号墳の周溝幅は広いところで2.5mであるが、3号墳と周溝が接するところでは3号墳の周溝をよけるように幅0.6mになり、溝の切り合い関係も3号墳の周溝の埋土を切って4号墳の周溝が造られていることから、さきに3号墳が築造



第20図 4号墳実測図

されており次に4号墳が造られていたことがわかった。

5号墳は発掘区西端の方形周溝墓群のなかで見つかり1基だけやや離れているので、2～4号墳とは別単位になる可能性が高い。おそらく5号墳より西にのびる丘陵上に1～2基の古墳群の単位が考えられる。台地斜面部に立地しており、周溝の形状から円墳になると思われる。

周溝幅は1.5mを測り、今回の調査でわかった周溝部分から推定すると直径約8mの規模になる円墳と考えられる。主体部は発掘区域外で道路によりすでに削平されている可能性が高い。

古墳の築造時期については、3・4号墳より6世紀前半でも新しい時期の須恵器・土師器、5号墳より6～7世紀代の須恵器・土師器が出土している。周溝内出土遺物から3基とも群集墳・横穴墓群成立以前の6世紀前半代の古墳と考えたいが、5号墳についてはやや時代が降る可能性がある。

なお、7号方形周溝墓の溝上層より須恵器の長頸瓶頸部の小破片が、拡張トレンチから埴輪の破片が、表土より5世紀末の須恵器などが出土しておりそれらと古墳群との関連も注目していかなければならないだろう。

第2節 遺物

i) 弥生時代の遺物

弥生時代中期

弥生時代中期の遺物は方形周溝墓や埋没谷から出土しているが、土器棺以外小破片で表面も摩滅しているものが多く、確実な時期決定ができていないものも含むが以下記述していく。

中期中葉の土器は第21図2・3・4・28、第22図33・34・36・37・40～43・50・51・47～49・65・70・71・72で嶺田式段階のものである。

中期中葉の壺形土器は、細頸で竹管文を多用する細頸壺（赤彩される場合が多い）の2・28・34・51・70・71と、中期前半の特徴を残す肩部突帯文が施された広口壺の47がある。ほかに33・37・36・42・48などの縦や横の条痕文の施されたものも中期中葉段階の壺の破片と思われるがはっきりしない。

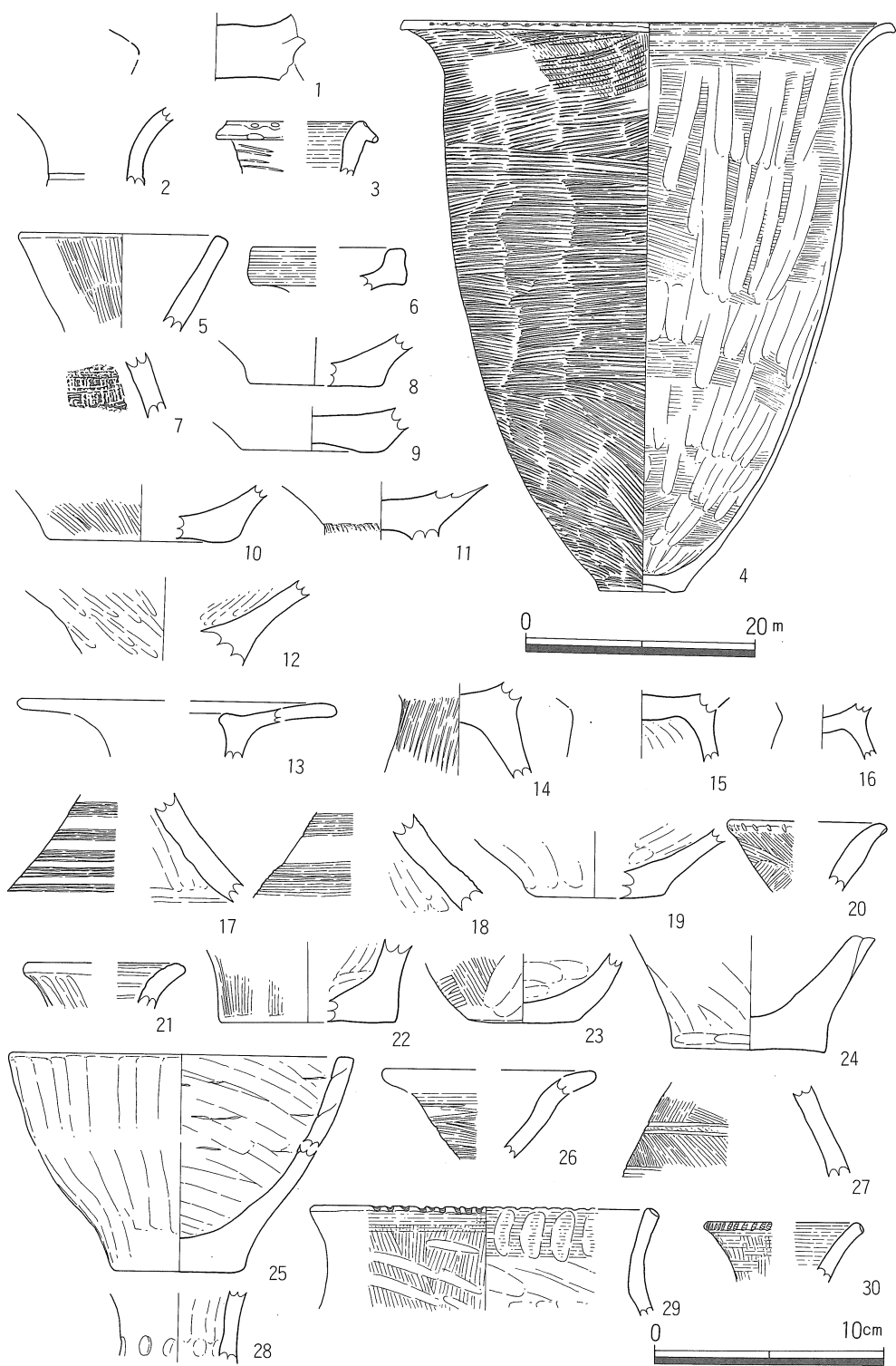
中期中葉の甕形土器は、口縁に篋状工具で刻目を施し外面条痕内面粗い刷毛目を施す4、口縁端部の面が広がり下端部が突帯化しつつあり中葉でも新しい要素を持つ3、条痕仕上げであるが口唇端部の刻目が細かく後葉に近い手法の72などがある。

中期後葉の土器は、第21図1・5～27・29・30、第22図31・32・35・39・44・45・73で白岩式段階のものである。

中期後葉の壺形土器は、直線的に開く口縁をもつ細頸壺5、受口口縁になる細頸壺の6などがある。文様としては、横位の櫛描文が施される7・17・18・73、細格子目が施される44、細刷毛目上に沈線文を施す27などが特徴的である。壺底部は8・9・10・19・35などである。

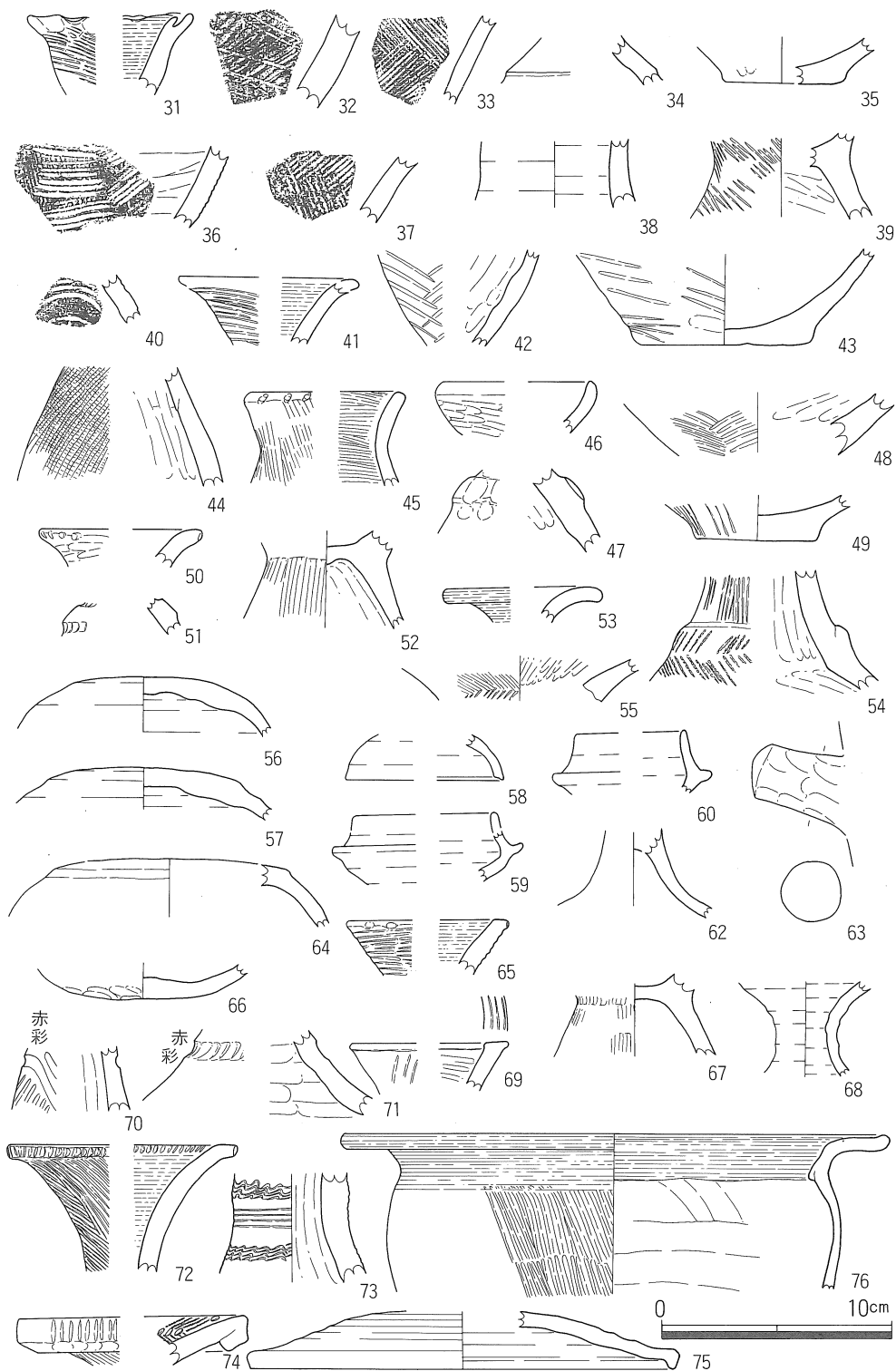
高坏は鐙状口縁で口縁内部に張り出しがある13がある。ほかに11・12なども高坏の破片と考えられる。

甕形土器は、台付甕の14～16・39と、平底の22～24がある。どの口縁と組み合わせになるか良くわからないが、45などの縦方向に緩やかに外反するものは台付で、外に開きながら小さく外反する20・21・26・31などは平底ないし小さな台がつくものと思われる。39は条痕仕上げの台付甕で、32などの粗い条痕を仕上げ調整にもってくるものが胴部になると思われる。21・26も粗い条痕仕上げの甕で39と同類になる可能性がある。29・30の甕は口唇端部に細かな刻目が



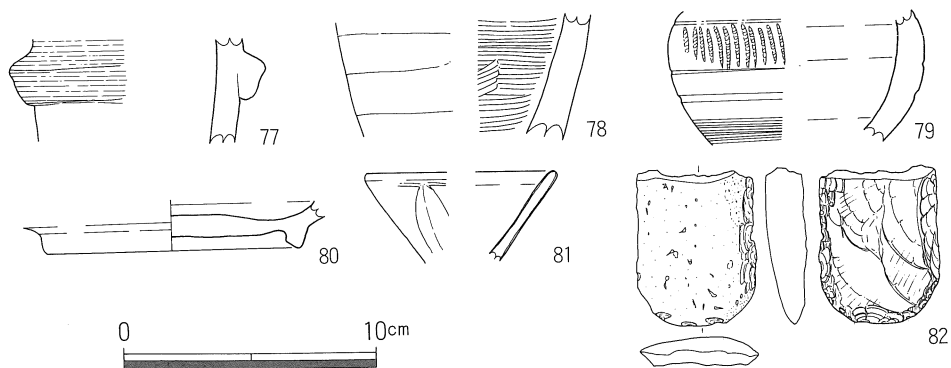
第21图 遗物实测图 1

1 · 2 = 1号墓 3 · 4 = 2号墓 5 ~ 16 = 4号墓 17 ~ 23 = 4 · 7号墓 24 · 25 = 5号墓
26 = 6号墓 27 ~ 30 = 7号墓



第22図 遺物実測図 2

31~38=7号墓 39=8号墓 40~43=SD1 44~46=SI1 47=SK1 48・49=SK4
 50・51=9号墓 52=SK10 53=SK11 54=SB4P4 55=SB7P3 56~59=3号墳
 周溝 60~65=4号墳周溝 66~69=5号墳周溝 70~76=埋没谷Ⅲ'層



第23図 遺物実測図 3

77・78＝拡張トレンチ表土 79～81＝C 5 区表土 82＝S I 1

施され、白岩式というよりも天竜川以西の高蔵式・長床式の甕の影響で成立している可能性の高いもの（搬入品か？）であろう。

ほかに口縁が緩やかに開く鉢形土器の25がある。白岩式段階の鉢の類例が少ないが、後期のものに比べると深い。82の打製石斧は縄文土器の出土がないので中期のものと考えたい。

弥生時代後期

弥生時代後期とわかる遺物は少なく、掘立柱建物や埋没谷などから出土している。壺形土器は折り返し口縁で口唇端部に縦方向の刺突文が施される第22図74は後期後半新段階、所謂有段羽状文の施された54は後期後半新段階、坏部と脚部の接合部に羽状刺突文の施された55は後期後半のものである。52は後期段階と思われる台付甕である。

ii) 古墳時代の遺物

古墳の周溝などから出土している。

須恵器は坏蓋の第22図56・57・58、坏身は59・60がある。何れも小破片ではあるが6世紀前半でも中頃に近い時期のものであろう。79は5世紀代に遡る可能性のある底部にかき目の施された甕、68の甕の口縁及び38の長頸瓶の頸部は7世紀代前半のものと考えられる。

土師器は口径が14cmを測りそうな模倣坏蓋の64も6世紀前半代、62の短脚の高坏も6世紀代のもと思われる。66の土師器坏底部は小破片ではあるがあまり口径が大きくならないで7世紀代に降るものとも考えられる。

77・78は埴輪の破片で拡張トレンチ表土から出土している。表面はいずれも摩滅しており調整技法ははっきりわからないが、78の内面には横位の細刷毛目調整が施されており、77は崩れたM字状のタガがつけられており、5世紀後半～6世紀前半代のものであろう。

iii) 奈良時代～中世の遺物

奈良時代の遺物は8世紀中頃の坏蓋の75、高台坏身の80、長甕の53・76などがあり埋没谷や表土から出土している。

中世の遺物は13世紀代の蓮弁文が施された中国製青磁の81がある。

第5章 考 察

第1節 静岡県下における中期方形周溝墓の出現過程について

i) はじめに

本調査でも、山下遺跡について東海東部地域における弥生時代中期中葉前後の出現期の方形周溝墓が発見された。東海地方の方形周溝墓の出現の意義についてはかつて述べたことがある（袋井市教育委員会 1986）ものの、近年静岡県下では袋井市・浅羽町団子塚遺跡や静岡市瀬名遺跡、南関東地域では埼玉県小敷田遺跡や千葉県向神納里遺跡において中期中葉＝嶺田式あるいは須和田式段階の方形周溝墓が相次いで発見されている。本報告書では本調査結果と近年の調査例とあわせて伊勢湾や東海東部あるいは南関東地域にかけての方形周溝墓の伝播の問題について、紙面の関係もあるのでとくに群構成と墓道の推定復元といった視点にたって考察してみたい。

本報告書では群構成の用語については石黒立人氏の見解どおり（石黒 1987）隣接しながら溝を別個に掘削し造墓するものは接続式、先行した方形周溝墓の溝を再度掘削し造墓を続けるものを連結式、さらに石黒氏の用語の中にはないが先行する方形周溝墓の溝のひとつを再利用しつつ結合し造墓をつづけるものを結合式とし用語の整理をしたい。

ii) 宇佐八幡境内遺跡の方形周溝墓の群構成

宇佐八幡境内遺跡の群構成について検討をしてみると第24図に示したとおり、Ⅰ～Ⅳ群にわけられた。やや離れたⅣ群を除いた各群は整然とした重列状態で単位群を形成していることがわかる。また、Ⅰ～Ⅲ群の単位群間は、山下遺跡でも確認されたごとく、1～2 m間隔で空間がありあたかも墓道を推測せしめる状況がある。各単位群間の空間地を墓道として復元すると、3本の墓道がうかびあがりそれぞれ墓道A～Cと命名した。方形周溝墓の墓道復元についてはすでに福井県吉河遺跡（福井県教育庁埋蔵文化財センター 1986）や浜松市山の神遺跡（浜松市教育委員会 1989）の方形周溝墓の分析で墓道を復元している事例もあり、本報告書でも単位群と墓道との関係から方形周溝墓の群構成を考えてみたい。

Ⅰ群の造墓順位を考えてみると、2号墓と1号墓は土器型式のうえからは2号墓のほうが古い。溝の切り合いはなく一見結合式を思わせ1号墓から2号墓への造墓も考えられるが、土器型式の新旧関係とは合わない。ここでは、土器の型式差と結合しあう溝の幅がやや広いため、2号墓の溝を掘りなおして1号墓が掘られた連結式と考え2号墓から1号墓の造墓を推定した。

Ⅱ群の造墓順位については溝の切り合い関係から、4号墓より6号墓のほうが古いことが判明している。4号墓と3号墓については切り合い関係がないうえ、3号墓から型式のわかる土器がでていないので造墓順位はわからないというのが現状である。ただし、4号墓は単位群の中では3号墓より溝の作りがしっかりしていることと同じ状況がⅢ群の単位群にあり、それらを参考に築造順位を推定すると、4号墓が先行し3号墓が新しいと考えた。

Ⅲ群については7号墓がまずつくられ5号墓が結合し、さらに切り合い関係はないものの8

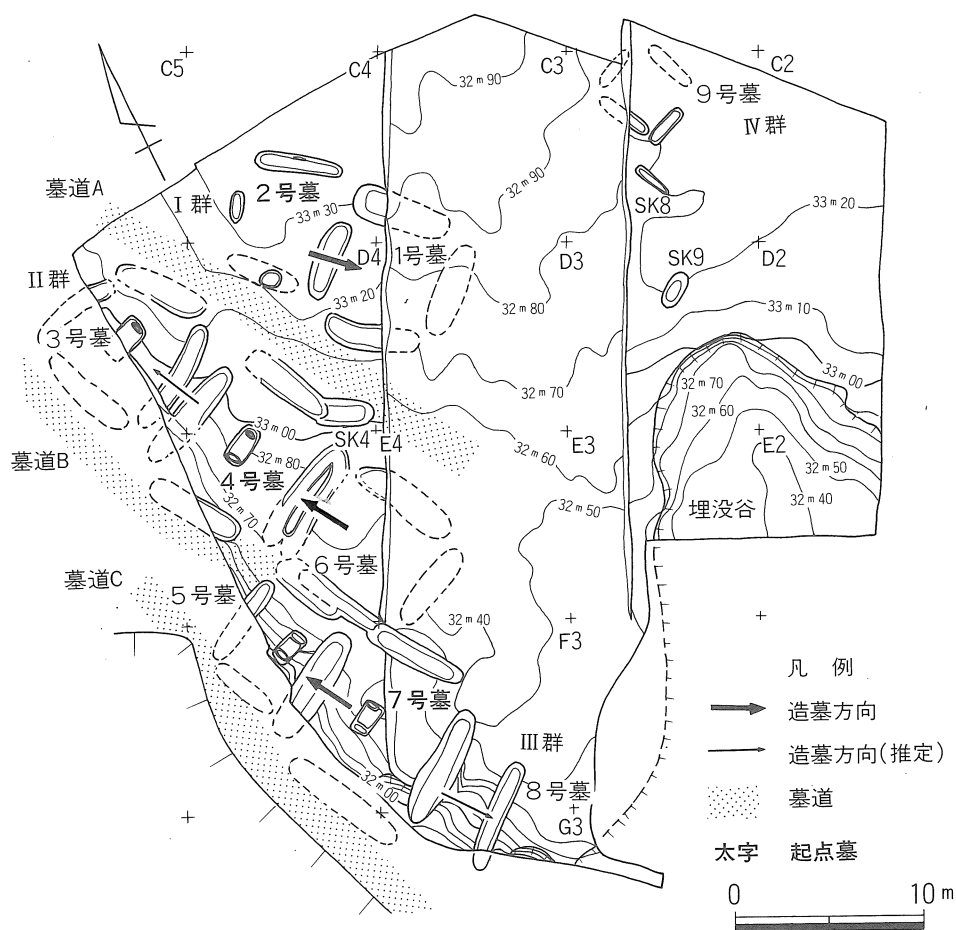
号墓へ連接式で築造を進める単位群と推定される。

IV群については1基しかみつかっていないが、台地の内部は比較的小形の周溝墓が形成されることを示すのか興味深い。

さて、I～III群までの単位群で最初に造られたものを基点墓と命名して考えると、2号墓・6号墓・7号墓などが基点墓といえるものである。基点墓はそれぞれの墓道間に後の造墓空間を予測した位置に築造され、各单位群とも墓道にそった形で造墓を進めていることがわかる。

以上のように宇佐八幡境内遺跡の方形周溝墓の群構成でわかったことをまとめると、(1)方形周溝墓群は2～3基のまとまりをもつ単位群が存在し、(2)各单位群は墓道に規制された基点墓が配置され、(3)各单位群は墓道にそって造墓が進行したことにより重列状態に群構成をとり、(4)単位群の形成方法は連接式、連結式、結合式などのバラエティに富んでいることである。

さて以上の視点にたって、まず静岡県内の出現期あるいは中期後葉の方形周溝墓についての



第24図 宇佐八幡境内遺跡方形周溝墓群構成図

群構成を考えてみたのち、神奈川県歳勝土遺跡の群構成を検討しながら南関東地域あるいは尾張地域を中心とする伊勢湾沿岸部と静岡県下方形周溝墓の出現の様相について考察してみたい。

iii) 静岡県内の中期方形周溝墓の群構成

静岡県内の方形周溝墓群のうち群構成がわかり発表されている資料は、中遠地域での中期中葉～中期後葉にかけて造墓される山下遺跡（袋井市・掛川市教育委員会 1984）、中期後葉を主として造墓される掛の上遺跡（袋井市教育委員会 1986）、静清平野での中期中葉～中期後葉にかけて造墓される瀬名遺跡7区12層（静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991）、中期後葉に造墓される能島遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989）の資料があり、これらの方形周溝墓の群構成を検討してみよう。

袋井市・掛川市山下遺跡（袋井市・掛川市教育委員会 1984）

山下遺跡の方形周溝墓の群構成についてはかつて考えたこと（袋井市教育委員会 1986）があるが、近年の状況で視点が変わったこともあるため再度群構成について検討してみたい。山下遺跡は中期中葉古段階からはじまり、中期後葉段階までの方形周溝墓が検出された。Ⅰ～Ⅷ群の単位群が想定されるが、このうち単位群がある程度明らかなのはⅠ・Ⅱ・Ⅲ群である。墓道については第25図に示したように、墓道A・Bの2本が想定される。群構成はⅡ・Ⅲ群では重列状態であるが、ほか単位群についてはほとんど発掘区域外になることから内容がわからないが、方向を違えた重列状態になると推定している。今回も群構成がわかり易いⅠ～Ⅲ群の群構成内容について再検討してみたい。

Ⅰ群の方形周溝墓については、溝の切り合い関係や出土土器型式の検討から山下遺跡では比較的古い段階になる可能性の単位群を一括して本群に含め、SX11・SX2あるいはSX1をあげることにする。さて、本単位群については、かつて筆者の見解として出土土器の検討から山下遺跡の中では最古の一群ではないかとの見解を示した（袋井市教育委員会 1986）のに対し、石黒氏よりSX2・11はSX3に接続した群構成をとるため大形のSX3から小形方形周溝墓のSX2・11への造墓をとるのではないかとの指摘を受けた（石黒 1987）。たしかに、SX2・11は一見するとSX3から接続した群構成をとると考えられるが、当地域の方形周溝墓の群構成の中では1基の方形周溝墓から2基の方形周溝墓に接続するのは稀なケースであること、出土土器で丸子式に近い段階の土器を出土するのはSX2の溝とSX2に連結したSX3の南溝だけでSX3はそれ以外の溝からは土器が出土していないことからSX3がSX2の溝を壊して築造された可能性はないか、あるいは報告書では2群土器に含めたもののうちSX1の太頸の条痕壺が朝日式段階の形態の模倣とも考えられ中期中葉段階でも古い段階になりはしないかといった点から本論でも山下遺跡の報告書の見解と違った立場にたちたい。しかし、石黒氏の指摘どおり一見した群構成の流れはSX3からSX2・11への連結した群構成とも考えられなくもない。SX2とSX3南溝からの中期前葉ないし中期中葉古段階に編年される可能性のある土器の出土の事実、SX1がSX2・11に先行し普通規模のSX1から小形のSX2・11への造墓の可能性はないか等々、はたしてSX3に連結してSX2・11の小形方形周溝墓が成立したといいきってよいのか躊躇する。そして、SX2に出土した土器は少量であったかもしれな

いが、東海東部に中期中葉古段階（原川遺跡出土土器段階）あるいは中期前葉段階において方形周溝墓の導入の可能性があったことは否定しきれていないと考えている。以上の点については資料の増加を待ちながら、今後の検討課題として受けとめたい。

Ⅱ群についてはS X 14が中期中葉中段階の土器が出土し、S X 13は中期中葉古段階の土器を出土することからS X 14からS X 13へさらにS X 12へ連結する造墓をなす。いっぽう、S X 14はS X 15、さらにS X 15からS X 16へ連結する群構成をなす。ゆえにⅡ群の基点墓はS X 14と考えられ、その時期は中期中葉でありS X 15も中期中葉、S X 13・12は中期中葉古段階に築造されたと考えられる。

Ⅲ群についてはS X 4あるいはS X 3が基点墓になると思われるが、連結する溝の規模がS X 3の他の溝に近い規模をとるため、S X 3からS X 4への結合と考えたい。S X 4からS X 6へは連結で、溝の切り合い関係からS X 4からS X 6への造墓順位が考えられる。土器はS X 4から中期中葉中段階のものが出土している。

以上のように山下遺跡の状況も宇佐八幡境内遺跡とほぼ同じく墓道が復元でき、基点墓を中心として墓道にそった重列されながらの造墓形態をとる単位群が想定される。単位群の形成方法は連結式、接続式、結合式などすべての方法が見られバラエティに富んでいる。

袋井市掛の上遺跡（袋井市教育委員会 1986）

掛の上遺跡第1次調査については第25図に示したとおり後期の方形周溝墓を除くと、中期後葉の方形周溝墓はⅠ～Ⅴ群の単位群と墓道A・Bが想定できた。掛の上遺跡については過去3回の調査が実施され10万㎡の面積をもつ大方形周溝墓群の可能性がでてきている。

各単位群はすべて結合式により構成され、調査者の川井正一氏によると方台部からの土の流入が溝内の堆積に見られ、その堆積方向から築造順位がとらえられている。その所見をまとめると基点墓は8号墓、10号墓、12号墓が推定でき、墓道にそって重列状態で造墓を行い、2～3基の単位群を形成することが判明し、宇佐八幡境内遺跡や山下遺跡と同じ単位群の形成が図られているが、単位群形成方法は結合式のみで行う点特徴的である。

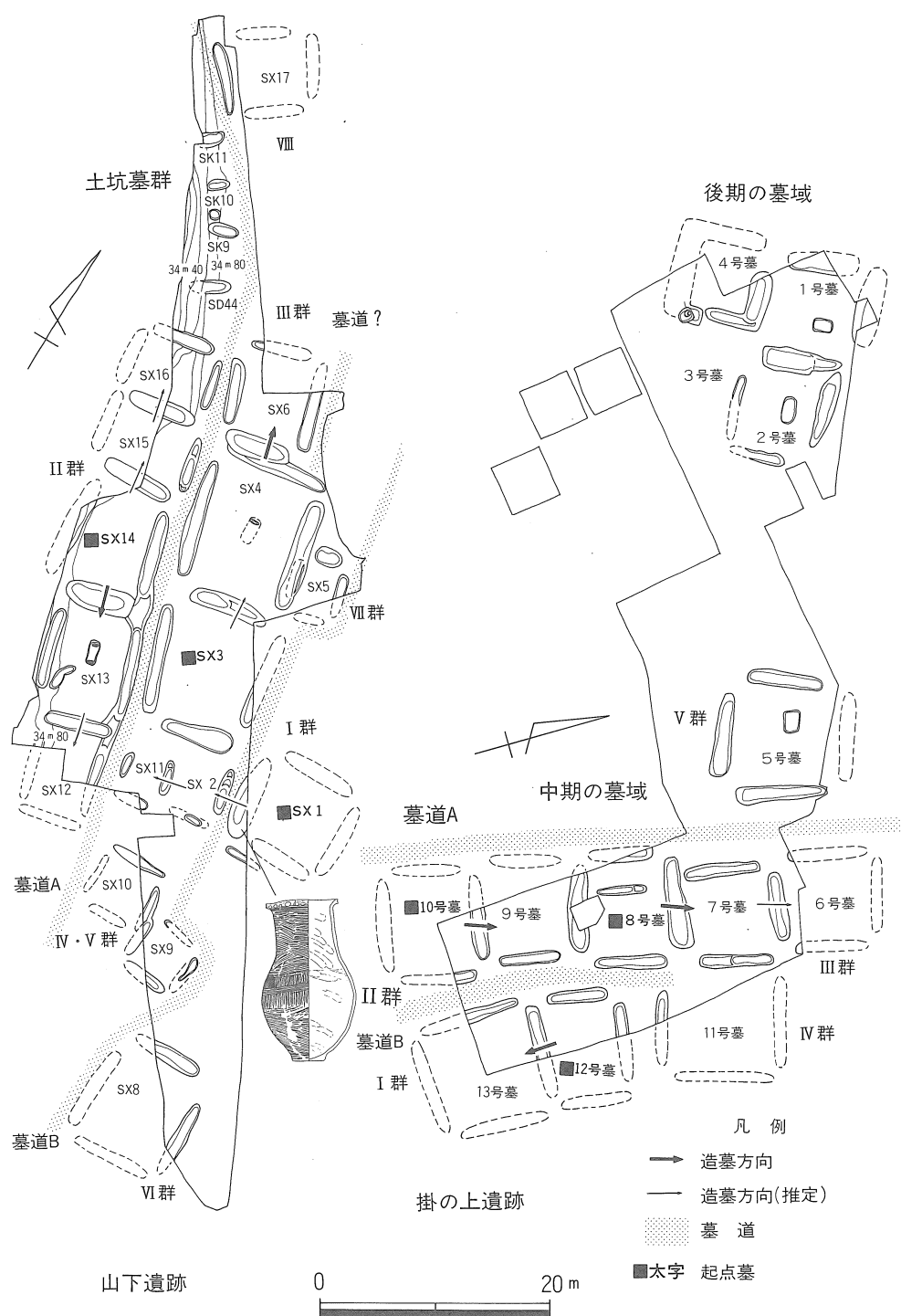
なお、掛の上遺跡の出土土器の中に嶺田式段階のものが含まれていることから中期中葉段階の方形周溝墓が存在する可能性がある。

静岡市瀬名遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991）

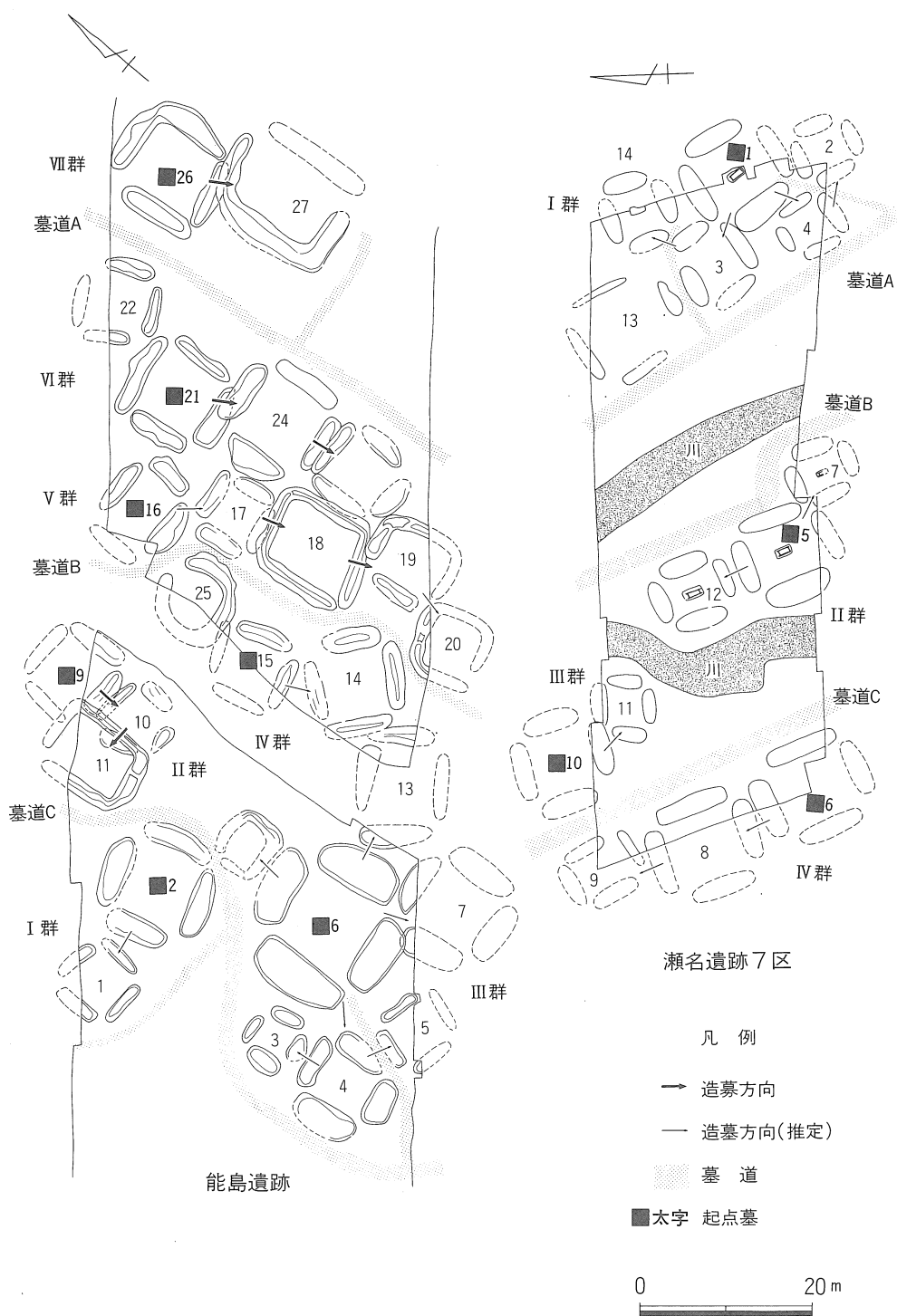
瀬名遺跡の7区12層で発見された方形周溝墓群は、出土土器から中期中葉～中期後葉の時期になる。担当者の栗野克巳・中鉢賢治両氏のご好意で土器を実見させていただいた結果と、各方形周溝墓の配置からⅠ～Ⅲ群の単位群と3本の墓道を推定してみた。しかし、これについては瀬名遺跡の報告書の刊行がまだなされていないため、あくまでも一つの考え方としての資料提示であって本格的な群構成の分析は本報告書刊行の後になされるべき点を強調しておきたい。

Ⅳ群の単位群は6号墓あたりが基点墓になりそうで8号墓、9号墓へと接続しながら重列状態で単位群が形成されており、宇佐八幡境内遺跡の群構成と同じである。

いっぽう、Ⅰ～Ⅲ群の方形周溝墓群についてはⅣ群とは異なり墓のコーナー部分に次々と造墓をくりかえしていく群構成をなす。結果的に単位群は重列状態にはならず団子状に密集状態



第25図 山下遺跡・掛の上遺跡方形周溝墓群構成図（報告書より一部改変再トレース）



第26図 能島遺跡・瀬名遺跡方形周溝墓群構成図（報告書より一部改変再トレース）



第27図 歳勝土遺跡方形周溝墓群構成図（報告書より一部改変再トレース）

をなす形状になる。ゆえに、墓道は基点墓築造の時点では直線的であったかもしれないがそのつど改変されⅢ群のように直線的に配置されることはなく曲がった墓道に改変されるか、あるいはきょくたんにいうと方台部のなかも墓道として利用している可能性もある。つまり、平行した墓道の中を重列状態で造墓していく宇佐八幡境内遺跡の造墓とは著しく異なる群構成をなしていることがわかる。

以上のように、瀬名遺跡方形周溝墓の単位群の造墓は平行した墓道の中を重列状態で行うⅣ群と、あたかも団子状に行うⅠ～Ⅲ群の２相にわけられることである。前者は宇佐八幡境内遺跡と同じであるが、後者については遠江では例がない。また、単位群の形成方法もすべて接続式で行われており宇佐八幡境内遺跡とは異なる。

静岡市能島遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989）

能島遺跡の方形周溝墓群については報告書がすでに刊行され報告者の佐野五十三氏により分析がなされているが、それを尊重しつつ筆者なりの見解を付け加え第26図に単位群の復元を行ってみた。単位群はⅠ～Ⅶ群、墓道A・B・Cの３本を想定した。

能島遺跡の場合も瀬名遺跡と同様にやや直線化が崩れるものの重列状に方形周溝墓を配置するⅤ・Ⅵ群、団子状の造墓を行うⅠ～Ⅳ群の２相が見出される。単位群の形成方法はⅤ・Ⅵ群では接続式もあるが連結式が多く、反対にⅠ～Ⅳ群についてはⅡ群で連結式がめだつがほぼ接続式を主としている。能島遺跡でも瀬名遺跡と同様に宇佐八幡境内遺跡とは異なり接続式・連結式はあるものの結合式はない。また、重列状に単位群の造墓をする群に連結式が多いことは瀬名遺跡が接続式を主としているなど異なる点もあり注目される。

また、能島遺跡では単位群のなかで平面プランが４隅が切れるものが比較的ふるいが、新しい段階になると１～２隅が切れるものへ変化しており、25号墓などは１箇所切れる円形周溝墓であり静岡県下では最古の円形周溝墓になるものも出現している。

iv) まとめ

以上、ながながと静岡県内の中期の方形周溝墓の群構成・単位群および墓道の復元対象になりうる4遺跡と、宇佐八幡境内遺跡の方形周溝墓群について検討してみた。まず、わかったことを箇条書にまとめそれについて尾張を初めとする伊勢湾岸地域との係わり、さらには南関東地域との係わりについて検討してみたい。

- (1) 2～3基を単位とする方形周溝墓の単位群が抽出でき、墓道の存在も想定できた。
- (2) 単位群の形成方法は遠江で連結式、接続式、結合式などひとつの方形周溝墓群のなかで比較的バラエティに富むが掛の上遺跡のように結合式を重視するものもある。駿河では重列状造墓のものは接続式ないし連結式を、団子状態のものは接続式を採用しており結合式は見られない。結合式は遠江の地域色と考えられる。
- (3) 単位群は墓道により規制され造墓を行う重列状態の群構成をなすものと、墓道にあまり規制されず方形周溝墓のコーナーに近い位置に列をずらして造墓を繰り返すことによって団子状態に群構成をなすものがあり、前者は遠江、後者は前者と両立した形で駿河で見られる。なお、今回の報告では、前者の重列状態で造墓するもののうち連結式・接続式・結合式など

の様々な単位群の形成方法を取るものを山下遺跡型とし、そのうち結合式を重視するものを掛の上遺跡型、後者の団子状のものを瀬名遺跡型として以下類型化し論を進めたい。なお掛の上遺跡型については今のところ掛の上遺跡でしか確認できていないので、山下遺跡型の一部に吸収される可能性が高いが、中遠地域だけの地域色となる可能性もあるため一応将来に備えて分類した。

(4) 4隅が切れるタイプの方形周溝墓で山下遺跡型の群構成をなす方形周溝墓群の終末については、漆畑敏・佐野一夫両氏の御教示によると近年調査された浜松市半田山遺跡で遠江では後期前半の古い段階まで続くようである。また、浜松市山の神遺跡の状況を見ると1隅切れのプランで連結式を重視する山下遺跡型の群構成をなすものが見られ後期後半の古段階まで続くようである。

(5) 遠江では4隅が切れるタイプのものが主であるが、駿河でも中期中葉新段階では4隅が切れるタイプのものが主であるが中期後葉段階の途中で1～2隅が切れるタイプのものが現れ、円形周溝墓も出現する。(尾張・三河の影響か?)

(6) 方形周溝墓の出現時期は遠江では中期中葉古段階(＝原川遺跡段階)と考えられ、駿河では瀬名遺跡の資料から中期中葉でも新段階(＝須和田式最終末の段階)であり、遠江と駿河では同じ中期中葉段階といっても2段階の開きが想定できる。

問題になるのは(2)・(3)の点で、この点について南関東地域の状況を見てみたい。南関東地域で最古の方形周溝墓で単位群の状況がわかるものに埼玉県小敷田遺跡(埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991)があげられる。小敷田遺跡の方形周溝墓は中期中葉でも新しい段階に属する方形周溝墓で重列状態で3基からなる1単位の方形周溝墓群が検出されている。単位群の形成方法はすべて連結式で行われている。群構成の型式及び単位群の形成方法はきわめて遠江と似たような状況で連結式を重視した山下遺跡型に分類できるが、3基の調査であるため瀬名遺跡型が存在するかわからない。今のところ山下遺跡型で連結式を重視しているとしかいえない。しかし、南関東地域における中期の方形周溝墓の導入を考えると、駿河の瀬名遺跡との関係も無視できない。それは、瀬名遺跡の場合山下遺跡型を採用する単位群は接続式で、連結式を重視する小敷田遺跡の方形周溝墓とは合わないが、方式のパラエティが少ない点同じである。さらに出現期は同じ中期中葉でも新しい段階であり、土器様式の点からも須和田式系土器文化圏に駿河～南関東地域も属する(松井 1985)ので、瀬名遺跡型の群構成についても中期中葉の新段階に南関東地域に導入がはかられている可能性が高いと考えているが見つからない。

この点について次に時期はやや降るが、中期後葉の神奈川県歳勝土遺跡(横浜市埋蔵文化財調査委員会 1975)の群構成について検討してみたい。歳勝土遺跡の群構成についてはすでに報告者の小宮恒男氏によりなされているが、それをもとに筆者の考えを加えたのが第27図である。歳勝土遺跡の単位群はⅠ～Ⅷ群、墓道はA・Bの2本が想定された。(Bは枝道)単位群の群構成は山下遺跡型のうち接続式を重視するⅥ・Ⅶ群、2基単位であるが山下遺跡型の連結式を重視したⅢ・Ⅳ・Ⅴ群、瀬名遺跡型に似るが基点墓に対し比較的溝の位置をづらさないで真横に団子状墓を広げていくⅠ・Ⅱ群がある。Ⅰ・Ⅱ群は接続式を重視することから瀬名遺跡と類似する群構成で

あるが、本論では真横に造墓する点を重視し、瀬名遺跡型とは区別し歳勝土遺跡型として論を進めたい。山下遺跡型のⅢ～Ⅶ群は墓道Aに規制されて造墓されており、歳勝土遺跡の中では中心単位とはならない点注目したい。この点については、瀬名遺跡や能島遺跡などでも比較的大形の方形周溝墓を含む有力な単位群は瀬名遺跡型の群構成を採用することと同一の現象と捉えられる。

以上の分析から歳勝土遺跡でも、瀬名遺跡型に類似する歳勝土遺跡型と山下遺跡型の2相の群構成が見られ、駿河地域の群構成と基本的には同じである。歳勝土遺跡で見られた2相の群構成は、南関東の千葉県佐倉市寺崎向原遺跡（佐倉市寺崎遺跡群調査会 1987）の中期後葉の方形周溝墓においても見られそうだし、千葉県東金市道庭遺跡（道庭遺跡調査会 1983）の方形周溝墓も山下遺跡型が多く見られるが歳勝土遺跡型も明らかに含まれている。このような情勢を見ると、中期中葉の状況が今ひとつ明らかでないが、中期後葉段階の南関東の方形周溝墓の群構成は駿河の瀬名遺跡・能島遺跡などの状況とはほぼ同じと考えられる。しかし、異なる点をあげると瀬名遺跡型に類似するがあまり溝の位置をづらさずに真横に次の方形周溝墓を配置し単位群の形成方法は接続式を重視する歳勝土遺跡型の群構成となり地域色を示す。これは、山下遺跡型からの影響あるいは伝播系統の違いのどちらかと考えられる。このあたりについては伝播先の伊勢湾地域との関係から考えてみたい。

東海東部域～南関東地域の方形周溝墓群の伝播元と考えられる伊勢湾地域について関係を検討してみたい。隣接の三河の状況は群構成のわかる方形周溝墓群は少ないが、西三河の岡崎市高木遺跡（岡崎市 1987）では中期後葉段階の方形周溝墓群が発見され、山下遺跡の群構成が見られるものの瀬名遺跡型・歳勝土遺跡型の群構成については採用されていないらしい。単位群の形成方法は連結式を重視している。

尾張の朝日遺跡（愛知県埋蔵文化財センター 1991）では膨大な方形周溝墓群が発見され、時期も中期前葉からはじまり後期にまでつづくものである。道路敷地内の発掘調査区のため平面的な全体像はつかめていないが、墓域Bとした地域の方形周溝墓群のうち中期前葉と中期中葉の方形周溝墓群に瀬名遺跡型、墓域Aとした中期前葉の方形周溝墓群に山下遺跡型に近い群構成をもつものが見られる。墓域Bの場合大形方形周溝墓を中心として中型、小形方形周溝墓が次々と造墓され、墓域Aとは規模の点において群構成の方法ともども明らかに異なる点があり注目される。単位群の形成方法は中期前葉段階は接続式、中期中葉段階では連結式を重視して採用していると思われる。墓域Aの中期前葉段階の方形周溝墓群の単位群の形成方法は連結式を重視している。また、朝日遺跡では山下遺跡型の群構成を採用するものが中期中葉段階では顕著に見られない。

以上のように尾張の朝日遺跡の群構成は中期前葉段階では山下遺跡型に近い内容のものと瀬名遺跡型の内容のものがあがり、一見して駿河～南関東地域に近い内容をもっていることがわかり、この点についてはすでに石黒氏により着目されている。さらに石黒氏は、遠江地域の山下遺跡型の群構成の発生を朝日遺跡の墓域Aに求めている（石黒 1987）。

山下遺跡型の群構成の発生については尾張の山中遺跡（愛知県埋蔵文化財センター 1991）での前期新段階の方形周溝墓群と、三重県北部地域の東庄内B遺跡（三重県教育委員会他 1970）での中期前葉の方形周溝墓群が参考になる。山中遺跡の方形周溝墓は前期新段階において東海

地域の特色をなす4隅の切れるタイプの方形周溝墓がすでに成立していることを提示したばかりでなく、2～3基からなる単位群が接続式で形成されていたことが判明した点重要である。しかし、山下遺跡型の群構成にはなっていない。いっぽう、東庄内B遺跡では石黒氏が分析したとおり、連結式を重視した山下遺跡型の群構成の発生を見ることができる。これらの点から考えてみると、4隅の切れるタイプを主として接続式・連結式を単位群の成形方法に採る山下遺跡型の方形周溝墓の群構成は、東庄内B遺跡で見られた連結式と重列状に造墓する要素（隅が切れる平面形態は尾張的）は中期前葉段階（前期の新段階の可能性もある）で三重県北部域を通じた経路からもたらされ、4隅が切れるタイプの方形周溝墓と接続式の単位群の形成方法の要素は尾張地域で発生し、朝日遺跡において中期前葉段階で融合されたと考えられる。

瀬名遺跡・歳勝土遺跡型に類似した群構成の発生は地域はやや異にするが近江の中期前葉～中期後葉の方形周溝墓群からなる服部遺跡（滋賀県教育委員会 1985）の状況が参考になる。服部遺跡での方形周溝墓群は平面プランは溝が全周あるいは1～2隅を切るタイプを基本とし単位群の形成方法は連結・接続式を重視する山下遺跡型に近い群構成をもつ単位群と、溝を全周するタイプを基本とし連結式を重視する瀬名遺跡・歳勝土遺跡型に近い群構成をもつ単位群の2相が確認できる。後者は平面プランにおいて溝を全周させる点や単位群の形成方法が連結式を重視しているという点では畿内の朝日遺跡とは異なるものの、群構成の2相という点では朝日遺跡と同じ様相を示している。また、服部遺跡での2相のうちの前者は隅が切れるタイプのものを含んだり重列状態の群構成をなすなど尾張との関係が強いが、後者については畿内の様相と考えたい。おそらく、朝日遺跡の大形方形周溝墓を含む瀬名遺跡・歳勝土遺跡型の祖形となる群構成の発生は服部遺跡などとの関係を考え近江からのルートを想定したほうがよいか、あるいはもう一方の畿内との関係をもちうる三重県北部域を考えたほうがよいか、2地域の瀬名遺跡・歳勝土遺跡型の祖形となる群構成をもつ方形周溝墓群の発見がポイントであろうが、今のところ近江が有力なように思える。

以上の点から静岡県下の方形周溝墓の導入過程を考察してみると、朝日遺跡の山下遺跡型に近い群構成をもつ墓域Aの方形周溝墓群は小形クラスに属する方形周溝墓である点着目してみると、おそらく三河をつうじた遠江への方形周溝墓導入は中期前葉新段階～中葉古段階に朝日遺跡墓域Aの小形クラスの方形周溝墓群の群構成のみを採用し、それに地域的な特色のある結合式の方法を加え山下遺跡型を完成させたと考えられる。大形方形周溝墓を中心にもつ瀬名遺跡・歳勝土型類似の群構成は地域の共同体の経済や階層化の成熟度の違いから遠江では採用されなかったと思われる。その後、中期中葉でも新しい段階においておそらく尾張あるいは三河の伊勢湾から直接駿河の瀬名遺跡へ瀬名遺跡型の群構成が伝播したのではないかと考えられる。瀬名遺跡および能島遺跡での瀬名遺跡型の群構成をもつ単位群の基点墓が比較的大形（朝日遺跡では中ランク）のものを採用するのは尾張あるいは三河からの直接の影響であろう。瀬名遺跡・能島遺跡での山下遺跡型の群構成をもつ点については遠江の影響か尾張からの直接的な影響か判然としないが、朝日遺跡では中期中葉段階の山下遺跡型に類似した群構成は今のところ確認できていないので遠江からの影響と考えたい。

このような静岡県下の状況から南関東地域の方形周溝墓を考えると、小敷田遺跡については遠江の山下遺跡型の群構成が駿河地域をつうじて伝えられたと考えられる。中期後葉期の群構成のうち歳勝土型は瀬名遺跡でみられた接続式を重視した瀬名遺跡型の群構成に影響され、また真横に接続するのは山下型の影響で成立したと考えられる。さらに連結式・接続式を重視する山下遺跡型の群構成も見られるという(遠江・駿河の2地域影響)2相の群構成をもつものが出現したと考えられる。

東海地域から南関東地域への方形周溝墓群の伝播の理解はやはり尾張を中心とする伊勢湾地域の様相がポイントとなる。しかし、遠江においてもひとつの中継地点としての重要な地域でもあることもまた重要なポイントとなろう。本論は石黒立人氏の論(石黒 1987)に触発されることが多く、石黒氏の論について十分に理解しきれていない点も多いと思う。尾張地域の朝日遺跡・山中遺跡の方形周溝墓群の分析、あるいは三重県北部地域の出現期の方形周溝墓の資料の増加に期待したい。

第2節 宇佐八幡境内遺跡周辺域における5世紀の首長墓と初期群集墳の動向

i) はじめに

宇佐八幡境内遺跡のもう一つの成果として、原野谷川北岸ではよく実態が知られていなかった横穴・横穴式石室を採用する群集墳成立以前の6世紀前半の所謂初期群集墳が検出できたことである。さらに、宇佐八幡境内遺跡の周辺部では和田岡原に古墳時代中期の前方後円墳を初めとする首長墓も成立しており、初期群集墳と首長墓が同時に見られる興味深い環境にある。本論では、宇佐八幡境内古墳群をはじめとする初期群集墳と首長墓について本地域の場合どう係わってくるのか簡単に考察してみたい。

ii) 宇佐八幡境内古墳群について

宇佐八幡境内古墳群は従来知られていたのは全長29mの小形前方後円墳である1号墳と直径15mの2号墳だけである。本発掘調査においても古墳が3基(3号～5号墳)が新たに発見できたため、2号墳と発掘調査区域の周辺部の微地形測量図を作成してみたところ第28図に示したようにさらに1基の古墳(6号墳)が見つかり、宇佐八幡境内古墳群は直径10～15mクラスの円あるいは隅丸方形プランの古墳6基からなる群集墳であることが判明した。

時期は3号・4号墳についてはTK10でも新しい段階に属すると思われる須恵器が発見されほぼ6世紀前葉～中葉にかけて築造された古墳群であると考えられた。単位群の構成を検討してみると大きく地形的に見て5号墳とその付近に数基、2～4号・6号墳の2群に大別できる。単位群の内容を見ることができる後者を検討してみると、2号墳が最大規模で主墳と考えられ6号墳とで1単位群、発掘調査で確認できた3号墳と4号墳は溝を一部切り合うなど1単位を形成し切り合い関係から3号墳から4号墳への築造順位が判明している。

以上のように、宇佐八幡境内古墳群の内容を分析してみると、(1)単位群が形成されておりそれは2基で1単位であること、(2)2号墳など大別できる群の中に主墳らしいほかと比べるとやや大形のものを含むということがわかる。また、表土から出土した埴輪はそれ程遠距離地から流れ込んだものとも思えず、付近に埴輪をもつ古墳の存在も考慮にいれなければならない。

ii) 和田岡原とその周辺地域の首長墓の変遷について

宇佐八幡境内遺跡の周辺地域では首長墓と思われる小形の単独墳の発掘調査や測量調査が進んでおりそれらの紹介をしたのち、さらに和田岡原の首長墓の検討をしてみたい。

権現山古墳は宇佐八幡境内遺跡の展開する丘陵より一つ西側の丘陵に立地しており、測量調査の結果（袋井市教育委員会 1990）から全長35mを測る小形の前方後円墳であることが判明し、埴輪片と須恵器甕の小破片が採集されている。形態は後円部径は22m、前方部長は13mになり、後円部径を1とした場合の前方部比率は0.59の数値となる。

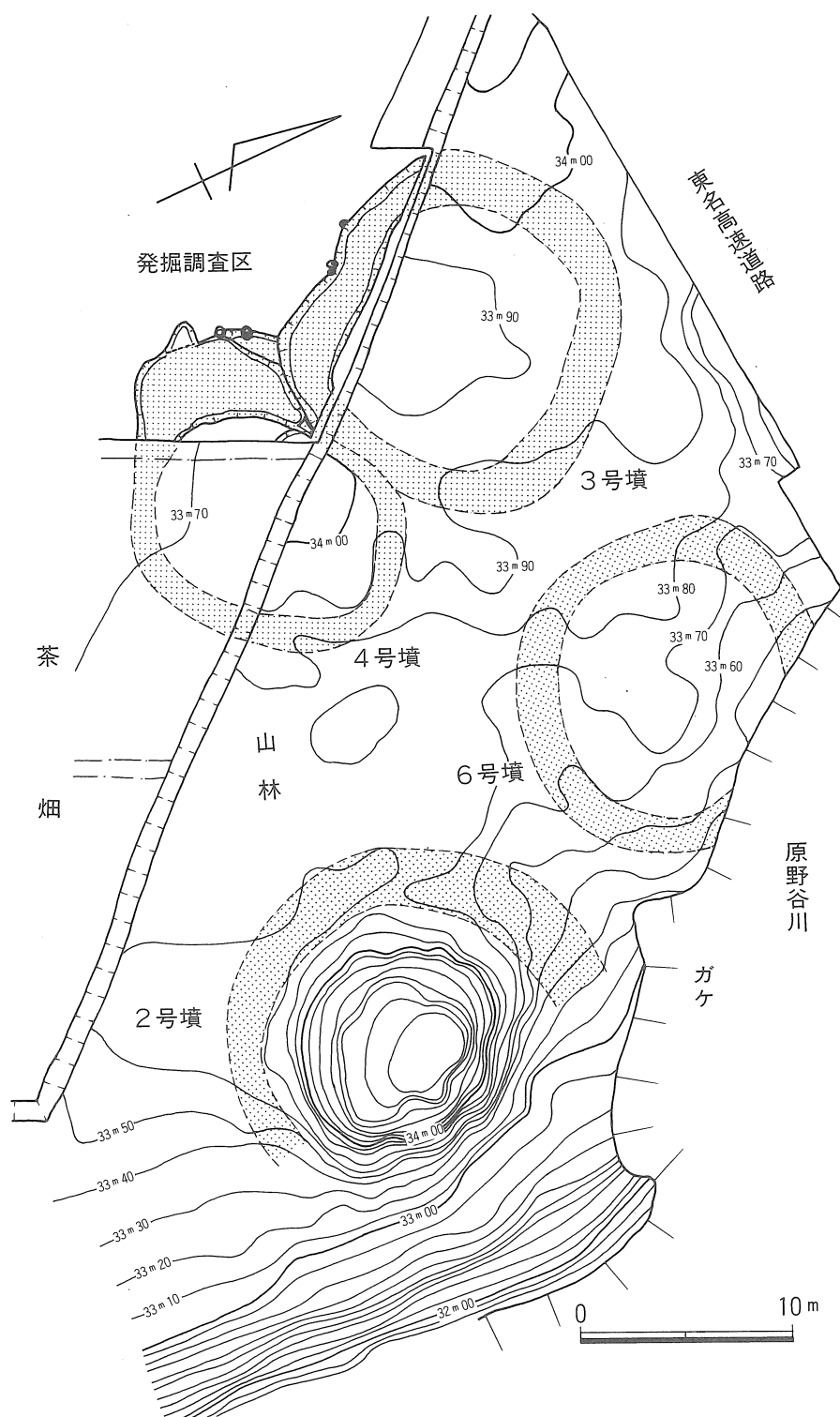
先述した宇佐八幡境内1号墳は、宇佐八幡境内古墳群より南側に広がる一つ下の狭い段丘面に立地しており、群集墳とは一線を画している。測量調査の結果（袋井市教育委員会 1981）全長29mを測り、後円部径15m、前方部14mとなり前方部比率は0.93の数値となる。遺物は採集されていない。

宇佐八幡境内1号墳のさらに下段の広い段丘面に石ノ形古墳がある。石ノ形古墳は、平成2年に周溝の一部が発掘調査され、第29図に示したとおり東西18m、南北24m、高さ4mと推定される方墳状の墳形をなす首長墓であることが判明した。周溝や墳丘から埴輪や須恵器片が採集でき第30図～第31図に示した。須恵器のうち5世紀後半～6世紀初頭になりそうな1の甕、3・4・5の壺破片などがある。ほかの須恵器については2の甕は6世紀後半、6～8・10・11については7世紀前半のものと考えられる。土師器は9の高坏、12の広口壺があるが6世紀後半～7世紀前半のものであろう。埴輪はいずれも小破片で全体形はわからないが、底部からタガ一段めまでナデ成形、台状のタガをナデ成形、一次成形は縦刷毛で二次成形を横刷毛を施すもので、黒斑のあるものは見られなかった。古墳とは直接関係ないが25は奈良時代後半、26は11世紀前半の清ヶ谷窯産の灰釉陶器、28・29は13世紀代の湖西・渥美窯産の山茶碗、29は12世紀後半の湖西・渥美窯産の甕、30・31は13世紀代の中国製青磁、32～34は17世紀～18世紀の志戸呂窯産の陶器である。35は16世紀後半の上志戸呂窯の製品と思われる摺鉢で原川城跡との関係が注目される。以上の埴輪や須恵器の年代観から石ノ形古墳の時期を考えると、須恵器は古くてもTK47型式になり、埴輪は二次調整に細かな横刷毛を残すので5世紀後半でもあまり古くならない時期と考えておきたい。

原川古墳は原川遺跡の発掘調査で沖積地に発見された、所謂造り出し部をもつ全長16m、直径14m、造り出し部2mを測ると推定される円墳である（静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989）。規模は群集墳の主墳クラスであるが単独墳で埴輪なども伴うことから首長墓と考えた。埴輪は一次調整縦刷毛のみの6世紀前半、須恵器も5世紀後半のものを含むが主体はTK10段階であるため、原川古墳の時期は6世紀前半でも新しい時期になると考えられる。

ほかに浅間山古墳（第2図参照）の前方後円墳があったと伝えられるが現存していない。

以上のように和田岡原南縁の首長墓を概観したが、変遷としては石ノ形古墳ないし権現山古墳が古いと思われ何れも埴輪、須恵器を伴う段階の古墳らしい。第32図に示した変遷図では石ノ形古墳の埴輪をTK47よりもやや古く考え、権現山古墳をTK47あたりの築造とした。宇佐八幡境内1号墳の場合は時期を決定する資料に欠けるが、遠江での全長30mクラスの首長墓は



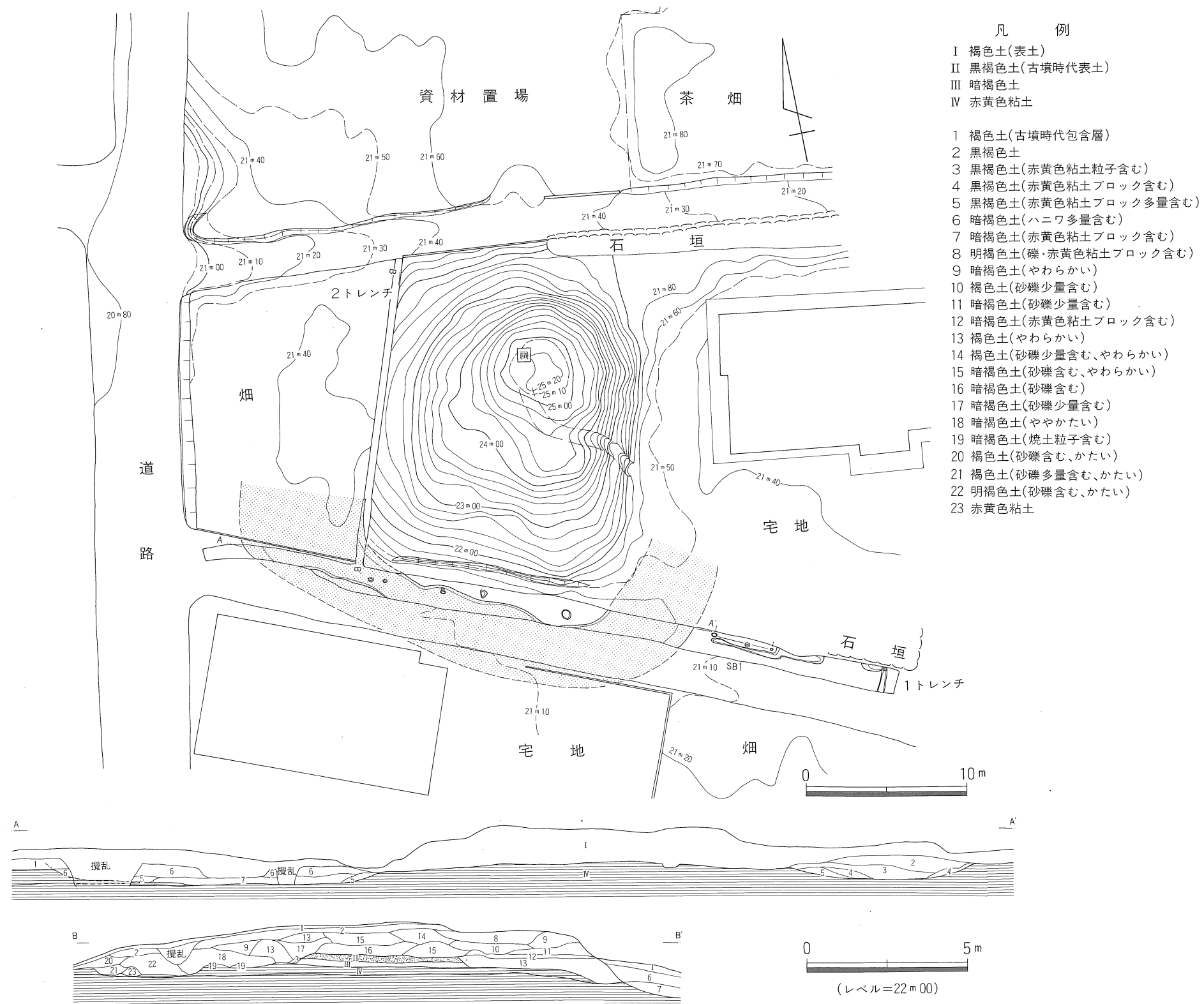
第28図 宇佐八幡境内古墳群地形測量図

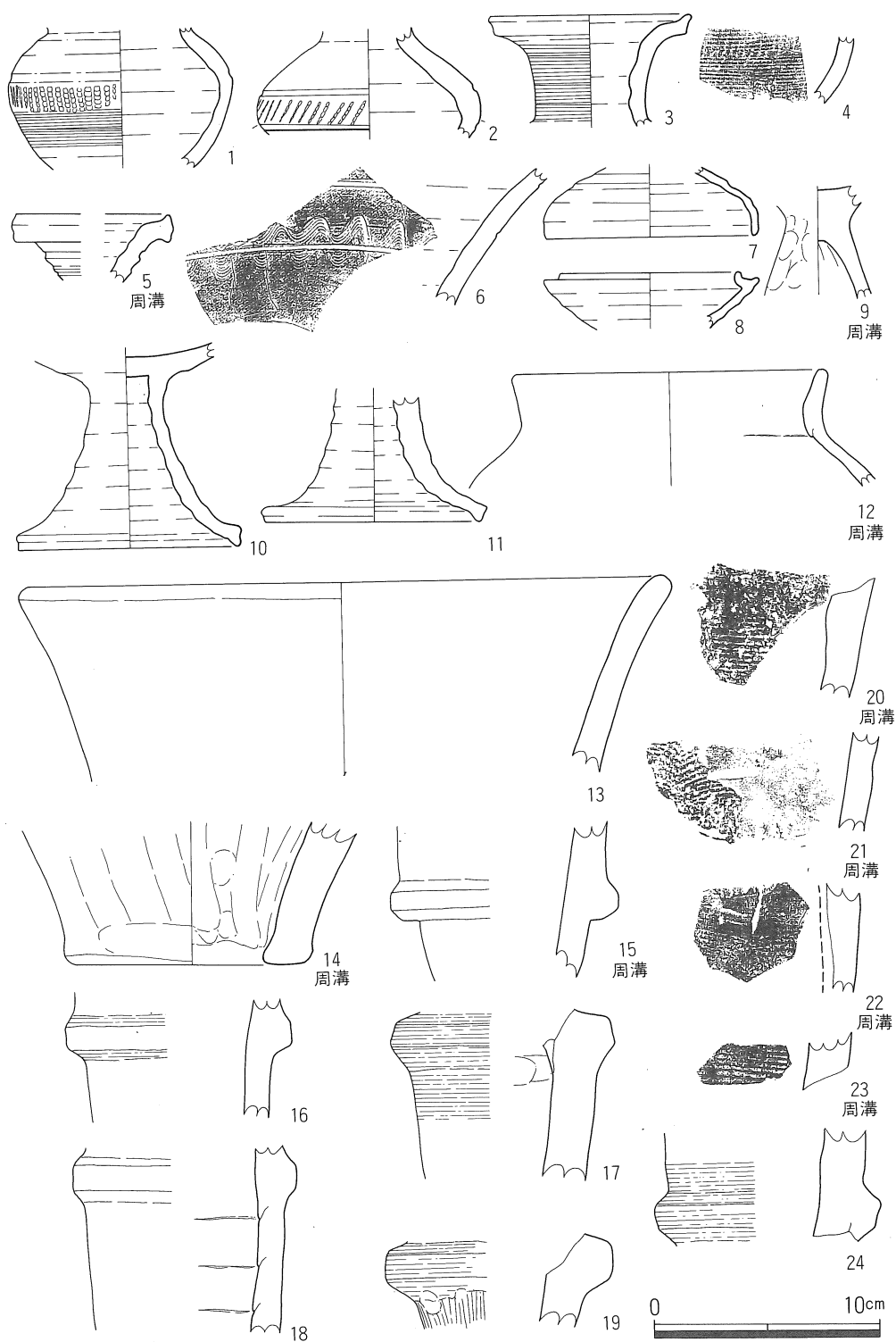
浜北市興覚寺後古墳（前方後円墳TK10古段階）、磐田市甕塚古墳（円墳MT15段階？）、袋井市大門大塚古墳（円墳TK10新段階）、袋井市丹生神社古墳（前方後円墳TK10段階）などがありMT15～TK10段階に出現していることが判明している。これらに宇佐八幡境内1号墳が該当すると考えMT15～TK10あたりの築造と考えた。宇佐八幡境内1号墳が造られたほぼ同じ頃のTK10段階に原川古墳が築造されたと思われる。

和田岡原の首長墓は、全長60mクラスの瓢塚古墳・各和金塚古墳・吉岡大塚古墳（以上前方後円墳）と全長40mクラスの行人塚古墳（前方後円墳）、直径35mの春林院古墳（円墳）などがあげられる。

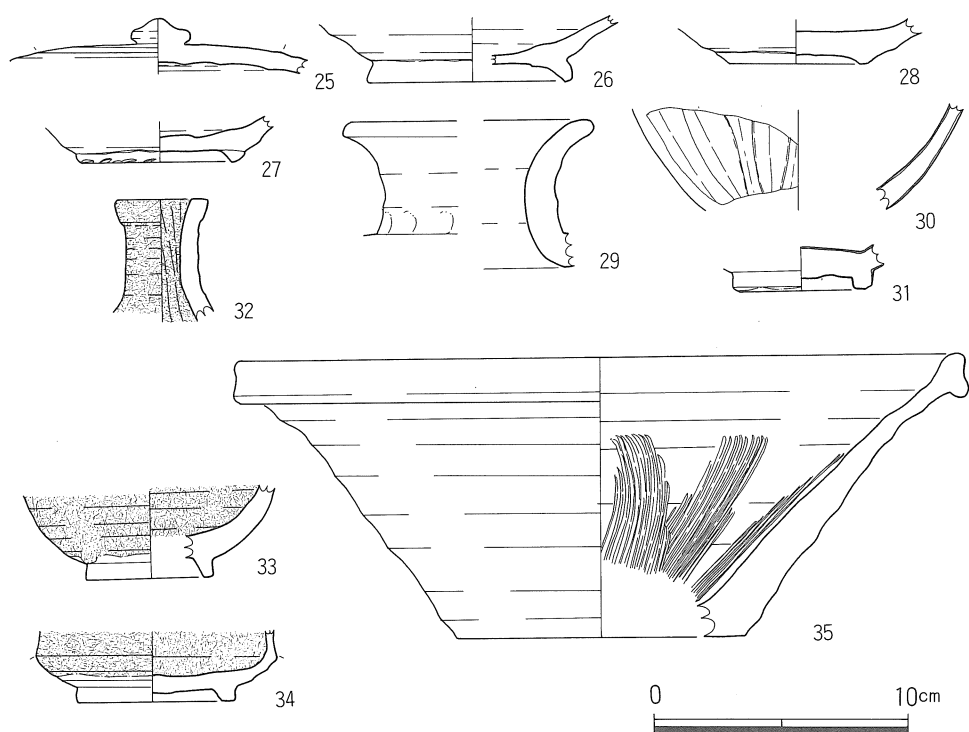
瓢塚古墳は全長63m、後円部径38m、前方部長25mを測り（掛川市教育委員会 1979）、前方部比率は後円部1にたいし0.66の数値を示す。主体部は破壊されているが粘土槨と推定されている。主体部からは変形獣文鏡が2面、勾玉1（滑石製）、管玉（碧玉製）及び埴輪が出土していると伝えられている。現存している変形獣文鏡の1面は内区文様が獣ないし神で外区は複合鋸歯文が配置されているものでもう1面は内区文様は風化が激しいか鳥頭四獣文？と考えられ外区は鋸歯文である。森下彰司氏の研究（森下 1991）によると前者の外区の鋸歯文や、後者の鳥頭四獣鏡の組み合わせは4世紀後半から5世紀初頭になるとされている。ただし、前者の内区の文様が何からの変形か判断がつかない点と、後者の内区文様が退化したものであり、今ひとつ鏡型式がはっきりしない点不安が残るが、前者については外区の複合鋸歯文の採用という点、後者についても獣の変化の点重視して5世紀でもかなり古い時期を考えたい。時期判定できる埴輪の検討については今回はできなかったが、概報の写真を見ると円形透の入った円筒埴輪が出土しているらしい。また瓢塚古墳出土と伝えられる壺形埴輪（春林院古墳発掘調査委員会 1966）は胴部が特異な形をなすが、口縁部は古式土師器から系譜が辿れると思われる複合口縁をなしているもので5世紀初頭～前半に編年が可能かと思われる。以上の点から、瓢塚古墳は5世紀前半でも比較的初頭に近い時期を考えたい。

各和金塚古墳は全長62.5m、後円部径39.5m、前方部長23.2mを測り（掛川市教育委員会 1981）、前方部比率は0.58の数値となる。主体部の確認もなされており中島郁夫氏によると（中島 1990）円礫粘土積の槨とも呼べる在地的要素の強い竪穴式石室？である。各和金塚古墳からは、主体部から剣、鉾、刀子、鉄鏃、三角板革綴短甲片、滑石製斧、滑石製勾玉、埴丘からは埴輪が出土している。埴輪は黒斑のあるもの、赤色に彩色されたものを含む円筒埴輪が見られ、表面調整はナデ成形のみのものが目立ち実見した範囲では刷毛目調整はなかった。主体部からの鉄鏃は平根鏃に古いタイプが見られるものの柳葉式の長頸化する直前の尖根の鉄鏃も見られる。この尖根鏃は田中晋作氏の研究によると第Ⅲ類の初現タイプに編年されそうなもので、それとともに田中氏分類第Ⅱ類の尖根鏃も含むセット関係を示し野中アリ山古墳段階に該当しそうである。さらに各和金塚古墳からは三角板革綴短甲が伴っており鉄鏃との年代は矛盾しないが、これについては、例えば円筒埴輪の検討からTK216～TK208の時期ともくされる浜松市千人塚古墳（鈴木 1990）においても三角板革綴短甲が出土しており、畿内中枢部の短甲配布とは異なり遠江では、三角板革綴短甲の副葬がかなり後まで残ると考えられる点注意を要する。





第30図 石ノ形古墳出土遺物実測図 1



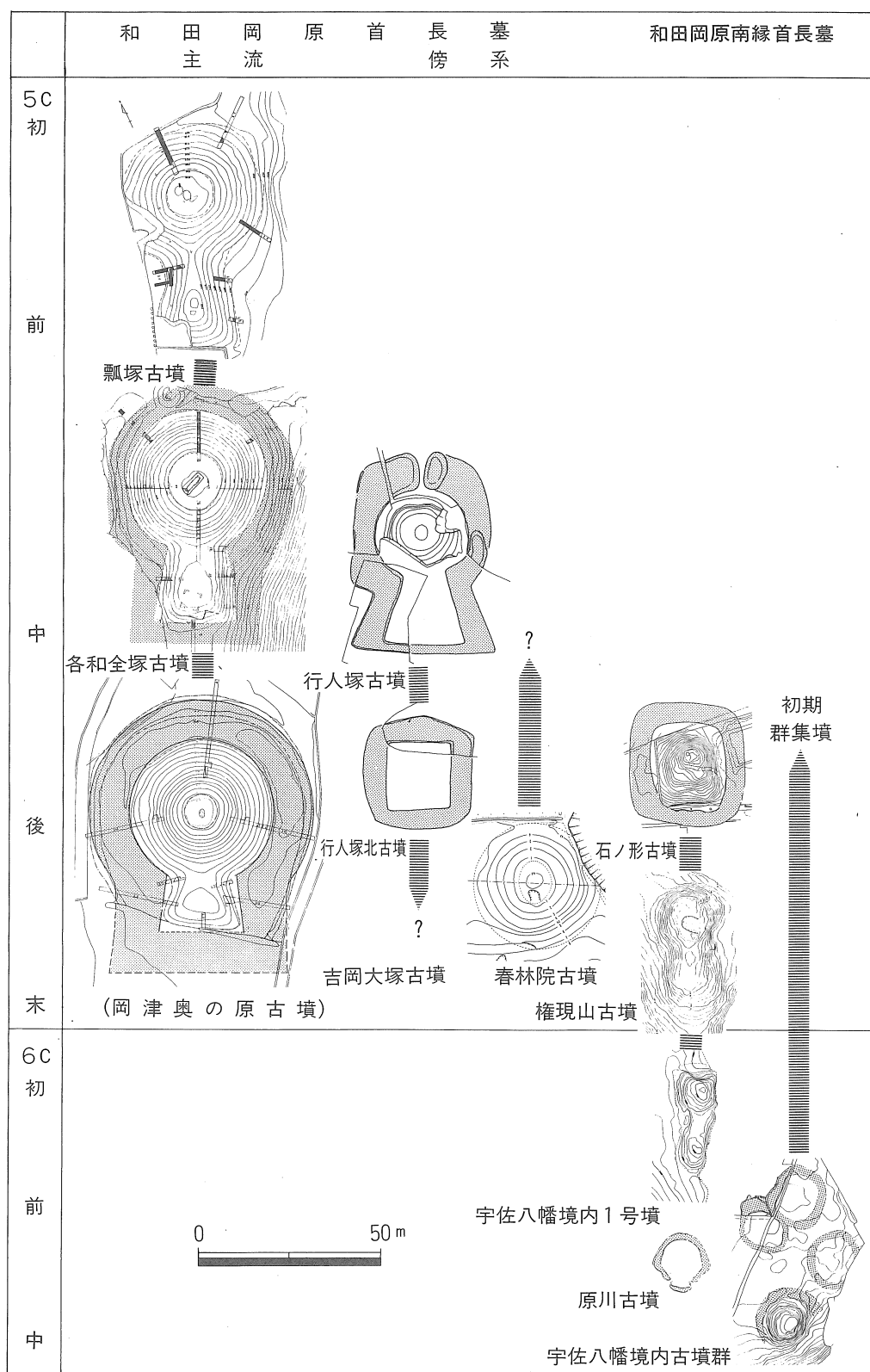
第31図 石ノ形古墳出土遺物実測図 2

以上の点から、各和金塚古墳の年代は黒斑埴輪の存在と鉄鏃のセット関係から磐田市堂山古墳とそう違わない5世紀前半でも中頃に近い時期と考えたい。

吉岡大塚古墳は全長55m、後円部径41m、前方部長14mを測り（掛川市教育委員会 1980）、前方部比率は0.34の数値になる。主体部からの遺物は知られていないが円筒埴輪が採集されている。埴輪は幅狭い台形のタガが付され、細かな横刷毛目を二次調整として施している。焼きは緻密でおそらく無黒斑の埴輪と推定され、時期は5世紀後半でも中頃に近い時期と考えたい。

行人塚古墳は全長42m、後円部径24m、前方部長18mを測り（掛川市教育委員会 1990）、前方部比率は0.75の数値になる。主体部からの遺物は知られておらず周溝の発掘調査がなされているが埴輪は伴っていないので、時期のわかる遺物は現状ではない。なお、行人塚古墳周辺部の近年の発掘調査で18mを測る方墳らしい古墳の周溝が見つかり、和田岡原の首長墓の一つと考えられ注目される。石ノ形古墳と関係を考えてもよいならば、当地域における首長墓への方墳の採用が5世紀後半にあった可能性があり興味深い問題点として指摘したい。

春林院古墳は全面発掘調査がなされ直径35mの円墳であることが判明している（春林院古墳発掘調査委員会 1966）。主体部は粘土槨で棺外から剣、やりがんな、はりが墳丘より埴輪が出土している。埴輪は赤彩色の朝顔形埴輪が出土しているが時期決定できるものではない。墳頂部の小穴から出土している壺形土器は当地域では5世紀後半～6世紀前半に編年されるもの



第32図 和田岡原とその周辺地域の首長墓変遷図（各報告書から一部改変再トレース）

である。埴輪の年代観が問題となり、主体部周辺の副葬品にやりがんなやはりなどが含まれているものの、小穴壺形土器を重視して5世紀後半でもそれ程古くはならないと考えたい。

和田岡原首長墓群の中では、ほかに画文帯神獸鏡を出土した岡津奥の原古墳があり鏡の同範関係から5世紀後半と考えられる古墳であるが、古墳そのものはすでに消滅している。

以上の点から和田岡原の首長墓の変遷を考えると、まず古いほうから考えると瓢塚古墳と各和金塚古墳があげられるが鏡の型式、壺形土器の型式から瓢塚古墳のほうを古く、鉄鍬のセット関係と埴輪型式から各和金塚古墳を新しく考え瓢塚古墳は5世紀初頭～前半、各和金塚古墳は5世紀前半～中頃と編年する。

つぎに、吉岡大塚古墳を検討してみると、まず埴輪が比較的新しい様相があること、それと設計計画の点から検討してみると辰巳和弘氏により指摘されている瓢塚古墳後円部径38m、各和金塚古墳後円部径39.5m、吉岡大塚古墳後円部径41mとほぼ同じ後円部径になる点着目したい。それは後円部1に対する前方部比率が瓢塚古墳0.66、各和金塚古墳0.58、吉岡大塚古墳0.34になり、瓢塚古墳～各和金塚古墳～吉岡大塚古墳の順で前方部の縮小現象が見られるのである。これは、系統の差というよりも前方後円墳の前方部の意義が失われる（政治的規制？）和田岡原首長墓の地域色の流れと解釈すると、瓢塚古墳～各和金塚古墳～吉岡大塚古墳の変遷が考えられるのである。行人塚古墳は全長42mで前方部比率が0.75の比率になり瓢塚古墳よりも大きな数値となる。これは、瓢塚古墳に連なる主流首長墓とは異なり前方部の縮小化の規制は受けない傍系の首長墓と考えられ、5世紀中頃～後半の年代を考えておきたい。ただし、行人塚古墳は傍系首長墓であると考えているが、前方部の形状から瓢塚古墳の系統から別れてくる可能性も考えておきたい。春林院古墳については主体部付近の壺形土器の型式を尊重すると5世紀後半でも新しい時期になり、行人塚古墳同様に傍系の首長墓と考えるか、あるいは直径が35mを測るので吉岡大塚古墳の後にくる前方後円墳から後円部の規模を縮小し円墳に代わった主流首長墓の末期段階の古墳とも考えられる。鏡などの副葬がないことなどから前者の可能性が強いと考えており、主流首長墓は岡津奥の原古墳と推定した。

iv) まとめ

以上のことから和田岡原の主流首長墓は岡津奥の原古墳も考慮にいれなければならないが、遅くとも5世紀後半でも新しい段階には没落し、新たに5世紀後半（TK23～TK47段階）に和田岡原南縁部の首長墓が別に出現したと考えたい。このことは原野谷川中流域の古墳時代5世紀後半～末段階の各集落の再編成に伴い、坂尻、原川遺跡などの有力集落の出現と関連していると考えている。ここで宇佐八幡境内古墳群をはじめとする袋井市域の所謂初期群集墳は、おおむねTK208の須恵器導入期から始まりTK10段階あたりで造墓を終了する。5世紀後半の初期群集墳が出現する時期は、和田岡原の首長墓から見ると没落化が始まる頃なのであろう。一方磐田原では5世紀中頃に遠江地域では一番有力な首長墓ともくされる全長115mの堂山古墳が成立した後は、前方後円墳は小形化し二子塚古墳などの全長64mの前方後円墳や、直径47mを測る円墳である京見塚古墳が出現している。こうした巨大な首長墓クラスの没落は、5世紀中頃までは和田岡原でみたような主流や傍系の有力首長の古墳祭祀の儀礼の場は有力首長の

古墳であったのにたいし、一般集落のなかの構成員から古墳祭祀を自ら行ないうる勢力（集落内首長層及びその構成員）が出現してきたことをうかがわせ、それが5世紀後半に拡大する初期群集墳の成立につながったのだと考えている。こうした現象は、例えば遠江における須恵器の一般集落での村落内首長層及びその構成員への普及、あるいは鈴木敏則氏により研究の進められてきている淡輪技法を持つ埴輪の伝播に見る伊勢湾をつうじた畿内との係わり合い、あるいは4世紀から成立し8世紀に官衙を出現させる坂尻遺跡などに見られる有力集落の集落規模拡大現象の初源を5世紀後半～末と考えるかといった問題にまで波及すると思われ興味深い問題を提示している。5世紀後半の時代性を考えつつ多方面からのアプローチが必要となるが、本論は報告書の考察であることと筆者の古墳時代に関する知識の薄さからそこまで触れることはできない。次回論考を持てたら幸いである。

＜参 考 文 献＞

- 袋井市教育委員会 1981 『長者平遺跡—昭和55年度緊急発掘調査概報—』
- 袋井市教育委員会・掛川市教育委員会 1984 『山下遺跡』
- 袋井市教育委員会 1986 「愛野向山A 1号墓緊急発掘調査報告書」『昭和60年度国庫補助事業緊急発掘調査報告書』
- 袋井市教育委員会 1987 『大門大塚古墳—昭和61年度基礎資料収集調査報告書』
- 袋井市教育委員会 1990 『権現山遺跡』
- 袋井市教育委員会 1990 『若作遺跡・若作古墳群』
- 掛川市教育委員会 1979 『瓢塚古墳測量調査報告書』
- 掛川市教育委員会 1980 『吉岡大塚古墳測量調査報告書』
- 掛川市教育委員会 1981 『各和金塚古墳測量発掘調査報告書』
- 掛川市教育委員会 1990 『女高遺跡・行人塚古墳発掘調査報告書』
- 春林院古墳発掘調査委員会 1966 『春林院古墳』
- 浜松市教育委員会 1989 『山の神遺跡』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989 『能島遺跡』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989 『原川遺跡Ⅱ』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991 『瀬名遺跡—平成元年度・平成2年度静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財発掘調査概報—』
- 愛知県埋蔵文化財センター 1991 「山中遺跡」『平成2年度年報』
- 愛知県埋蔵文化財センター 1991 『朝日遺跡Ⅰ』
- 岡崎市 1987 『岡崎市史 考古』
- 三重県教育委員会他 1970 『東名阪道埋蔵文化財調査報告』
- 横浜市埋蔵文化財調査委員会 1975 『歳勝土遺跡』
- 佐倉市寺崎遺跡群調査会 1987 『寺崎遺跡群発掘調査報告書』
- 道庭遺跡調査会 1983 『道庭遺跡第1分冊』

- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991 『小敷田遺跡』
- 滋賀県教育委員会他 1991 『服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 福井県教育庁埋蔵文化財センター 1986 『吉河遺跡発掘調査概報』
- 瓜生堂遺跡調査会 1981 『瓜生堂遺跡Ⅲ』
- 石黒立人 1987 「伊勢湾周辺地方における方形周溝墓出現の様相」『マージナルNo.7』
- 松井一明 1985 「嶺田式土器の検討」『転機創刊号』
- 辰巳和弘 1987 『日本の古代遺跡1 静岡』
- 森下章司 1991 「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林74巻6号』
- 田中晋作 1991 「武器の所有形態からみた古墳被葬者の性格」『論集 武具』
- 中島郁夫 1990 「東海（静岡）」『古墳時代の研究11』
- 鈴木敏則 1990 「遠江の淡輪系埴輪論」『転機3号』

宇佐八幡境内遺跡

1992年3月17日

発行 静岡県袋井市教育委員会
〒437 袋井市新屋一丁目1-1番地
☎ 0534-42-2111（内線227）

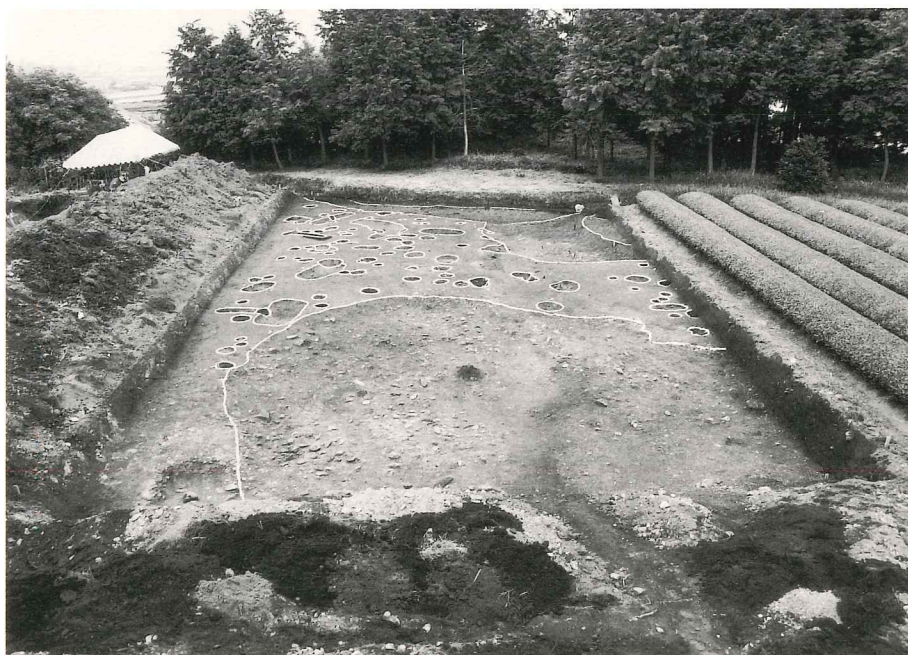
印刷 株式会社 開明堂
〒430 浜松市中沢町1-1



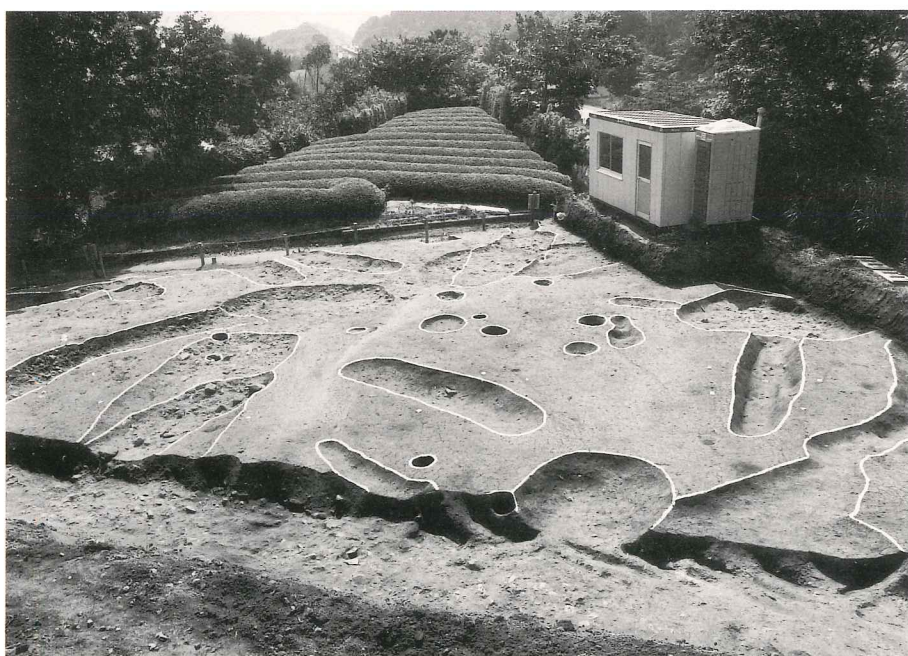
1.遺跡航空写真全景



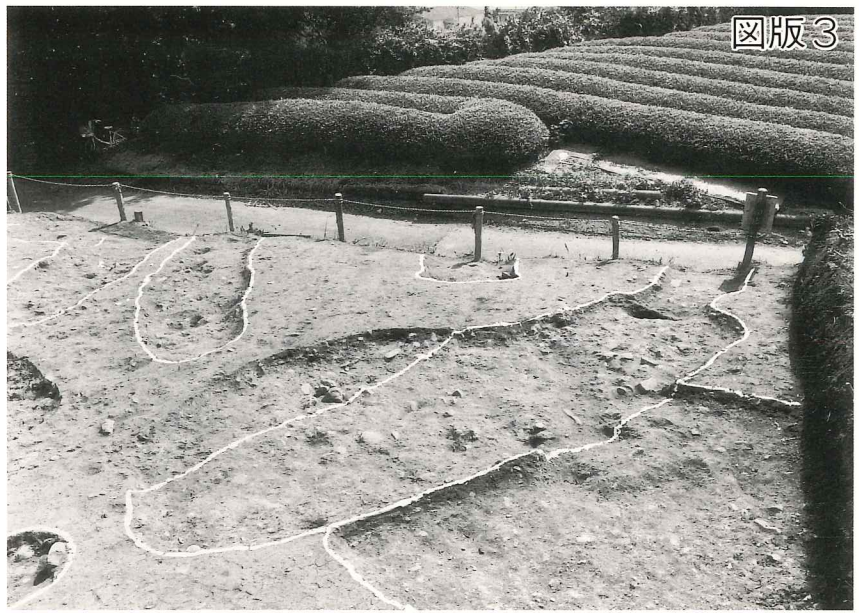
2.発掘区西部分全景（北より）



1. 発掘区東部分全景（南より）



2. 1～3号墓全景（東より）



1. 3号墓 (東より)



2. 4号墓 (東より)



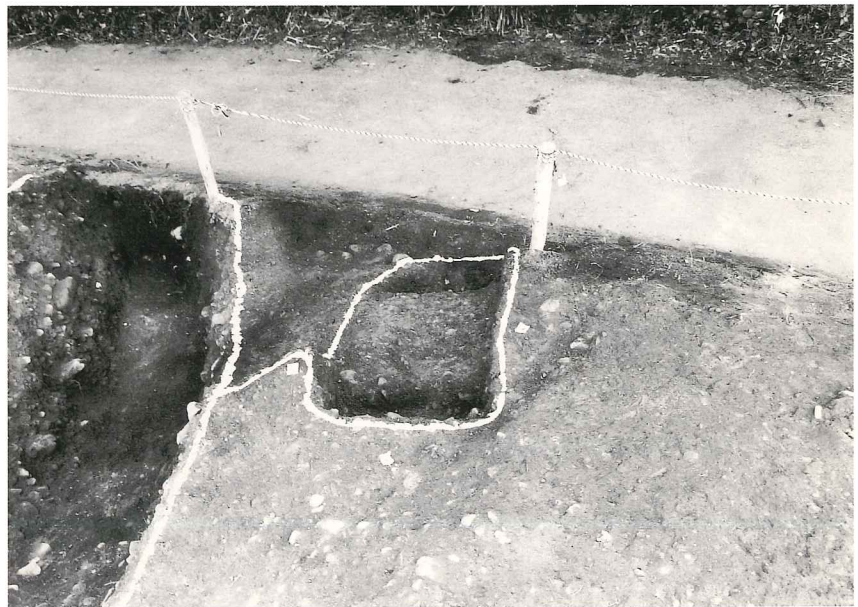
3. 7・8号墓 (南より)



1. 3号墓主体部（東より）



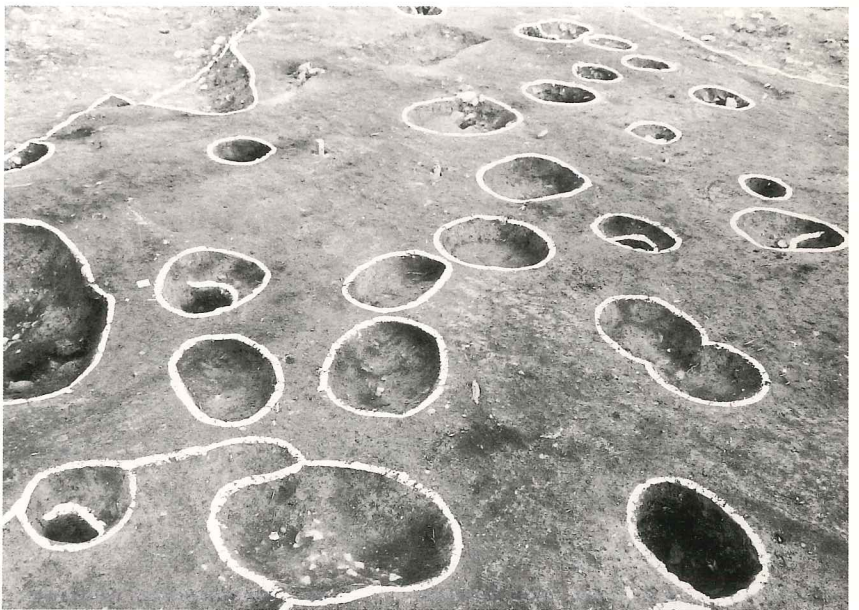
2. 4号墓主体部（東より）



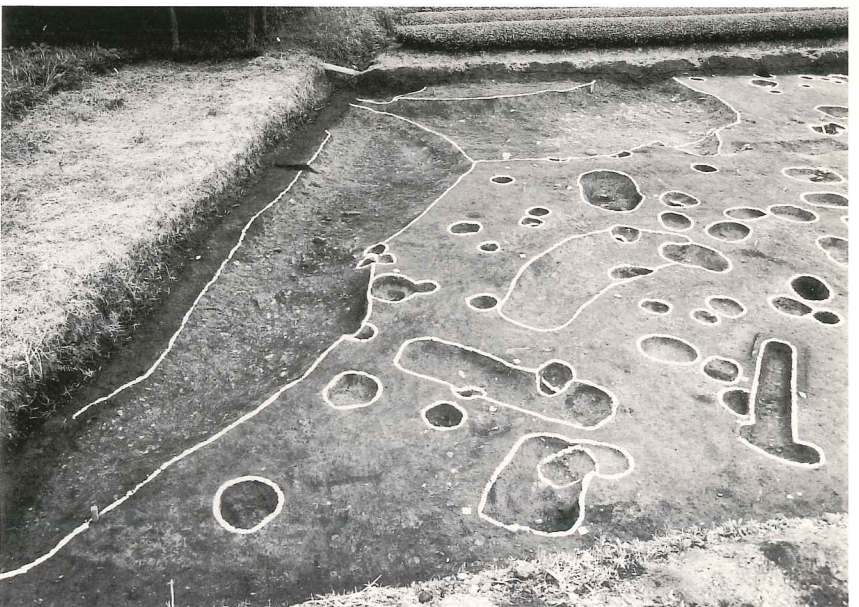
3. 5号墓主体部（東より）



1. 7号墓主体部（東より）



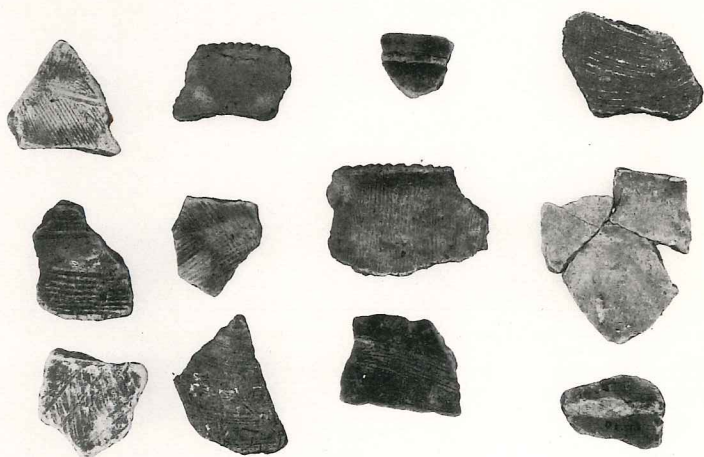
2. SB4（西より）



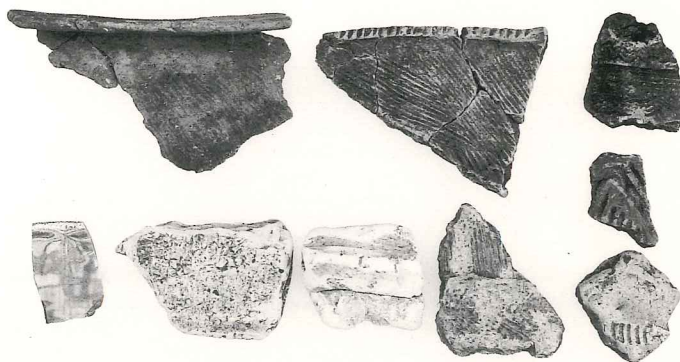
3. 3・4号墳周溝
（手前3号墳西より）



1. 2号墓出土土器棺



2. 方形周溝墓出土遺物



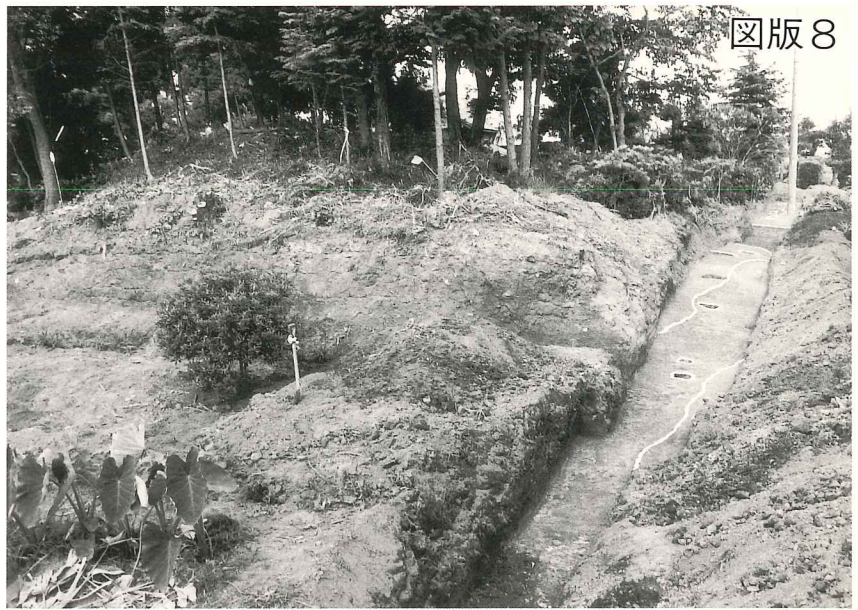
3. 埋没谷・包含層出土遺物



1. 石ノ形古墳全景（西より）



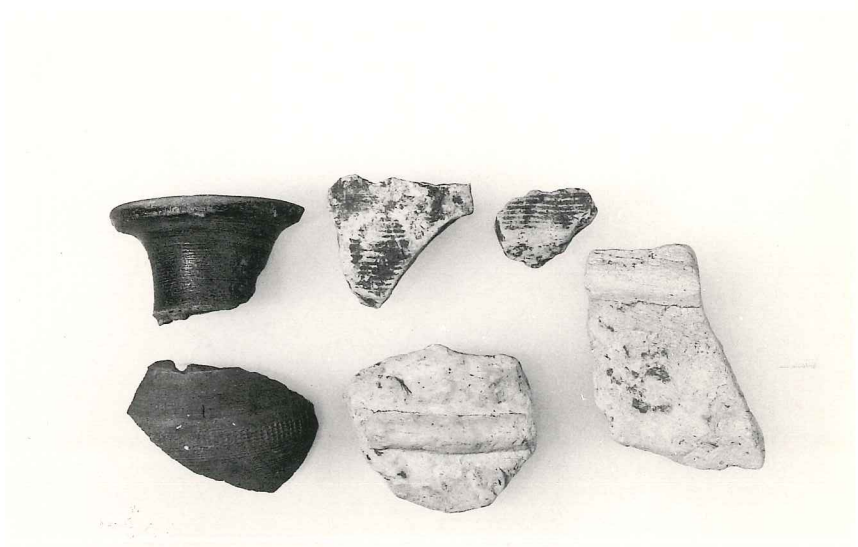
2. 石ノ形古墳墳丘断面（南西より）



1.1 トレンチ全景（西より）



2.1 トレンチ内周溝（南西より）



3. 出土遺物

